

国際医療福祉大学審査学位論文（博士）

大学院医療福祉学研究科博士課程

盲養護老人ホーム入所者による

ボランティア活動に関する研究

—地域での交流による変化—

平成 28 年度

保健医療学専攻・先進的ケアネットワーク開発研究分野・

介護福祉学領域

学籍番号：14S3042      氏名：田代 由美

研究指導教員：竹内 孝仁 教授

副研究指導教員：小平 めぐみ 講師

# 盲養護老人ホーム入所者によるボランティア活動に関する研究 —地域での交流による変化—

## 要旨

本研究の目的は、盲養護老人ホーム入所者がボランティア活動を通じておきる主観的な心境の変化と活動によってもたらされる周囲の変化を明らかにすることであり、施設入所後の地域交流のあり方や、生きがいづくりについての示唆を得るものである。本研究では盲養護老人ホーム入所者が地域で行う、マッサージのボランティア活動を通じての変化の様子と周囲の変化について、参与観察とインタビュー調査の分析を行った。結果、施設での生活では得難かった自己有用感の獲得により「生きがい」を見出されたことによって、前向きな心境の変化と行動の変化が起こることが明らかになった。また、参加していない同施設の入所者や職員にも生活活性化の変化や意欲向上が見られた。このことにより、生活歴に則したボランティア活動を地域で行うことが、施設入所者の QOL の向上と介護予防に効果的であり、それを支援していくことが、施設の重要な役割となると考える。

## キーワード

盲養護老人ホーム入所者 ボランティア 地域交流 生きがい

A study of blind nursing home residents volunteer activities  
-Changes in the interaction region-

Abstract

Purpose of this study is to subjective feelings of blind nursing home residents cut through volunteer activities and changes brought about by activities surrounding, and get a sense of community after admission to a facility of and enjoyment in. On the changes of students through the volunteer massage in this study do blind nursing home residents in the region, and around the analysis of participant observation and interviews. As a result, revealed that acquired in life talent self useful sense of “fulfillment in life” found that cause changes in a institutions do not participate. Can do volunteer works aligns with this lifestyle in the region residents QOL of though is effective in improving and preventive care that will help it become an important role of the facility.

Keywords

blind nursing home residents, volunteer, interaction region, fulfil

目次	頁
<b>I. 序論</b>	1
1.研究の背景	1
2.先行研究の状況と本研究の位置づけ	2
3.研究フィールドの概要	3
(1)M 盲養護老人ホーム	3
(2)ボランティア活動を行う地域交流カフェの概要	3
4.盲養護老人ホーム入所者のボランティア活動について	4
5.研究の目的	4
<b>II. 方法</b>	5
1.調査1の方法	5
2.調査2の方法	5
3.調査3の方法	6
4.倫理的配慮	7
<b>III. 結果</b>	8
1.調査1	8
2.調査2	9
(1)盲養護老人ホーム入所者がマッサージによるボランティア活動を開始する前	9
(2)盲養護老人ホーム入所者がマッサージによるボランティア活動を開始した後	15
3.調査3.盲養護老人ホーム職員からみた変化	21
<b>IV. 考察</b>	28
1.参与観察でみられた変化	28
2.ボランティア活動を通じての盲養護老人ホーム入所者の主観的な心境の変化	30
3.ボランティア活動によってもたらされた周囲の変化	32
4.高齢視覚障害者にふさわしい生活拠点としての盲養護老人ホーム	33
<b>V. 本研究の限界と課題</b>	36
<b>VI. 結語</b>	36
謝辞	37
文献一覧	38
資料	40

## I. 序論

### 1. 研究の背景

視覚障害者の人数は、厚生労働省が5年ごとに実施する「身体障害児・者実態調査」<sup>1)</sup>によると、全国で31万人（施設入所者は除く）、そのうち65歳以上の高齢視覚障害者は186千人で約6割に当たる。

多くの高齢視覚障害者は、視覚障害の生活訓練を受けて自立しており、社会生活に適応でき、就労や地域活動によって社会や他人との関係から自己有用感を得られる状態にある。このような高齢視覚障害者は、障害者支援施策や高齢者支援施策を活用し、家族の支援を受けながら、一般社会で充実した生活をしている。一方、中途視覚障害等により視覚障害者の生活訓練が未修得であり、一般の社会の中では自己有用感を得られていない高齢視覚障害者も少なからずおり、この人達の支援を行うための施設の一つが盲養護老人ホームである。また、前者で、高齢による体力低下や退職、家族などの支援を失うことにより在宅生活が継続困難になったと感じ施設のニーズが高まるケースも含まれる。

盲養護老人ホームは、特定非営利法人全国盲老人福祉施設連絡協議会により出された「高齢視覚障害者にふさわしい生活拠点と支援の在り方に関する調査・研究事業報告書」<sup>2)</sup>によると、2016年（平成28年）3月現在において全国に51施設、定員としては2,954人である。様々な事由により施設入所に至った場合に、それまで地域や家族の中で盲養護老人ホームに入所した時点で、視覚障害に由来する特有のニーズの困難は、設備や職員の専門性によって解消され、さらに高齢による身体能力の低下についての支援も行われる。そこには整った環境の中での安全で安心な生活はあるものの、マズローの欲求5段階説<sup>3)</sup>における第1段階の「生理的欲求」と第2段階の「安全欲求」を満たすまでにとどまっているといえる。施設の在り方について、そこまでは議論されてきてはいるが、「生きがい」に深くかかわりがあるとされるマズローの5段階欲求説<sup>3)</sup>に照らしたならば、より上位の段階に目を向けなくては、生活の質（Quality of Life ; QOL）の向上はあり得ないであろう。

盲養護老人ホーム入所者は、施設の希少性から住み慣れた地域から離れた土地にある施設に入所することが多く、それまで持っていた地域との接点を失ってしまうことになる。盲養護老人ホームは施設の機能として、高齢者支援と視覚障害者支援施設の専門性の追求に終始し、その問題に対してはほぼ論議されてこなかったし、そこに目を向けられることがなかったということも現実である。このように、盲養護老人ホーム入所者が持つ自己有用感の喪失と地域との隔絶という、2つの問題について、施設のある地域での新しいコミュニティへの参加と、ボランティア活動による自己有用感の再獲得が可能であれば、「生きがい」を持って充実した高齢期をおくることができるようになると考える。ひいては、介護予防、健康寿命の延伸につながることを実証できることを期待するものである。

視覚障害者の主要な職業は、国家資格であるあん摩マッサージ指圧師、はり師、灸師としての独立開業、病院、診療院等での勤務であり、これは視覚障害者の職業選択の狭さを物語っている。ただそれらで自立している視覚障害者が多数を占めていることは事実であり、また、有利性も否定できない。盲養護老人ホーム入所者も職歴として、あん摩マッサージ師の経験を持つ者が少な

くない。

このような背景から、盲養護老人ホーム入所者を対象として、マッサージという専門性を生かしたボランティア活動を地域で行うことで、「生きがい」の獲得に至るのかに焦点をあてて研究することとした。

## 2. 先行研究の状況と本研究の位置づけ

高齢期のボランティア活動に関して、妹尾・高木<sup>4)</sup>は、高齢者の援助行為と心理・社会的幸福感との関連を検討し、他人を援助し、ポジティブな感情を体験することが主観的幸福感につながることを報告している。また望月<sup>5)</sup>らは「ボランティアは活動であるため、目的・仕事・役割が明確である。その点で自分のする活動をしていくことは自分に対する人からの承認があり、また、主体的に取り組み、目標を持ち、創造をしていくことは、自己実現や達成の満足感につながるだろう」とし、高齢者の地域での「生きがい対策」はリクレーションではなく高齢者が「社会的役割」を自ら見出し、その責任を自らが担う社会参加が望ましいとしている。また、Greenfield&Marks<sup>6)</sup>によるボランティア活動によって役割アイデンティティを持つことが身体的・精神的健康に良い影響を与えることを示した報告では、高齢者にとって社会的役割が重要であることを実証的に示し、ボランティア活動がその役割を担えることを示している。

しかしこれらの研究の多くはボランティア組織に自ら積極的に参加している人が対象であり、中原<sup>7)</sup>によると、ボランティア活動を行いたいと思わない人に対するポジティブな効果が立証されているわけではない。

清水ら<sup>8)</sup>は在宅高齢者と施設入所者又は入院をしている高齢者の QOL に関する研究において、「高齢者にとっては、サポートを受けるだけではなく他者に対してサポートを提供することも、その人の QOL にとって重要である」とし、在宅の高齢者と同じように施設で生活する高齢者においても QOL の向上を目指すためのボランティア活動の有効性を予見している。また、市川・岩下<sup>9)</sup>は軽費老人ホーム居住者を対象として、認知症デイサービスでの交流・支援活動による変化を追うことで、「他者との交流や活動の場を提供し見守ることが生活活性化と自立維持に効果的である」としている。また、大湾ら<sup>10)</sup>は、離島における施設入所者の生きがいづくりに関する研究において、離島という環境で施設に入所した高齢者の“生きがいづくり”を、ふるさとの訪問によって検証し、その効果が本人の生きがいづくりのみではなく、「家族関係の深まりや施設サービスにも影響すること」を明らかにしている。しかし、施設入所者を対象としての生きがいに関する論文はまだ少なく、さらなる研究が必要であると思われる。

また、高齢視覚障害者を対象とした研究は、生活訓練や機能訓練に関するものが多く、酒井・新阜<sup>11)</sup>や佐藤<sup>12)</sup>の研究では、高齢視覚障害者の支援の在り方について、現状と海外比較等の研究に留まっている。柳澤ら<sup>13)</sup>は QOL の程度と視覚障害等級の相関を求める研究で、The 25-item National Eye Institute Visual Function Questionnaire (NEI VFQ-25) と Sumi Quality of Life Questionnaire (Sumi) の問診票を使用して QOL を評価しているが、「特に心の状態など心理的 QOL は視覚障害者等級に反映されていない」と結論付け、新たな評価表による認定基準の必要性を示唆している。また高田ら<sup>14)</sup>は、「地域における“視覚障害のある高齢者”への支援の現状と課題」において、「中年期の視覚障害はそれまでの社会関係の逸脱や喪失感も大きく、視覚障害の

みならず心理社会的・経済的な支援が必要」であるとし、高齢視覚障害者は家庭内生活においては「それなりの自立ができ、生命にもかかわらない」という理由から福祉サービスの介入が少ない傾向にあるが、本人や家族が「ニーズや支援の必要性を理解し、支援やサービスを受けることにより、視覚障害に由来する特有のニーズや困難が解消され、安全・安心が強化され、生きがいや予防介護につながる」のではないかと考察している。これは在宅における高齢視覚障害者に対する支援への提言であり、ここであげられている「視覚障害に由来する特有のニーズや困難」は盲養護老人ホームに入所した時点でほぼ解消されることから、それ以降についての具体的な生きがい獲得に向けての取り組みについて研究する必要があると考える。

### 3. 研究フィールドの概要

#### (1) M 盲養護老人ホーム

調査を行った盲養護老人ホームは定員 50 名、平成 2 年に全国で 46 施設目、県内では 3 施設目の盲養護老人ホームとして設立された。同敷地内に定員 30 名の特別養護老人ホームと居宅支援事業所、訪問介護事業所を併設。入所者は、視覚障害者手帳を有する 65 歳以上、養護老人ホームの入所要件（経済的事情、環境的事情）を満たし、住所地の市町村の入所判定会議により措置入所を認められた者である。調査開始時（平成 27 年 2 月現在）の入所者数は 49 名、うち 17 名が要介護認定を受けている。

職員配置は、生活支援員が 7 名、生活相談員 3 名、看護師 2 名、管理栄養士 1 名。介護保険に関しては個別契約型の施設として、要介護認定を受けた入所者に対しては、施設外の介護保険事業所からのサービスの提供を受けている。

入所前の居住地としては、施設のある同市内からの措置者は 36 名、同市以外の同県内からの措置者は 7 名、県外からの措置者は 6 名。施設の特異性と希少性により、比較的遠方からの入所が多い。

平成 24 年度より、全国老人施設連絡協議会が主催する介護力向上講習会に養護老人ホームとしては初めて参加し、自立支援介護の実践に取り組んでいる。

施設の老朽化に伴い、平成 27 年 1 月より建て替えのため同市内の仮施設に移転。新しい施設は平成 27 年 12 月に完成。改築後はそれまでの二人部屋から全室個室となる。

#### (2) ボランティア活動を行う地域交流カフェの概要

近年の地域コミュニティの希薄化による「社会的孤立」を背景とする様々な不安や課題を解消するために、地域住民同士の交流、地域とつながる「きっかけ」の場となることを目的とした、「地域カフェ」の開催が全国的に広がっている。これは地域の住民だけで開催する形式にとどまらず、福祉施設・企業等も重要な社会資源・担い手と捉え、施設・企業等と地域が互いに協力した取り組みも生まれている。その中で、研究対象施設 M 盲養護老人ホームのある F 市内の I 校区で開催される「地域カフェ」において、マッサージの施術を行うボランティアとして参加することとなった。

参加した「I 校区地域カフェ」は、地域住民と校区内の医療介護事業所、地元の商店連合会、自治協議会や民生委員、校区社会福祉協議会等で作る「地域ケア連絡会」において、地域の住民

が世代の枠を超えた交流をもつことにより、地域とつながるきっかけとなり、認知症の人や介護者、障害者、子育て世代、子供等、様々な人にとって、地域や人とつながりを持てる場となることを目的に始められた。運営費は募金と校区内の医療介護事業所の協力で、毎月1回開催されている。開催場所は医療介護事業所の持ち回りで毎月変わる移動型カフェで、希望者には医療介護事業者の車両による送迎も行っている。平均参加者数は100名、ボランティアは1回の開催あたり平均50名が活動している。

その他に不定期に行われる、数か所の公民館でのふれあいカフェ等に、社会福祉協議会を通じて参加している。

#### 4. 盲養護老人ホーム入所者のボランティア活動について

マッサージを業として行える者は「医師」と「あん摩マッサージ指圧師」のみであり、無免許でこれを業として行ったものは処罰の対象となる。「あん摩マッサージ指圧師」はあん摩マッサージ指圧師、はり師、きゅう師等に関する法律（昭和22年法律217号、「あはき法」と略す）に基づく国家資格である。ボランティア活動は1日3時間から6時間。施術を行う地域カフェの所在地である区役所の健康課医薬務係へ、その都度、開業と廃業の届け出を要する。

研究フィールドであるM盲養護老人ホームの入所者は、入所前の生活歴において、この「あん摩マッサージ師」を職歴とする者が多い。その中から、マッサージボランティアのサークル立ち上げの呼びかけに応じた入所者によって、活動が開始された。開始に当たり、ボランティアの受け入れについて、社会福祉協議会の協力を得て、参加の場を募集した。

活動内容は、地域カフェに来場した地区の住民に対して、希望者にマッサージの施術を行う。会場内にマッサージブースを設け、一度に平均4人が並んで横になり施術を行えるようにセッティングした寝具で、1人当たり20分程度の施術を行った。

#### 5. 研究の目的

盲養護老人ホーム入所者がマッサージというボランティア活動を通じて起きる主観的な心境の変化と活動によってもたらされる周囲の変化を明らかにすることを目的とし、施設入所後の地域交流の在り方や、生きがい作りについての示唆を得る。



## II. 方法

本研究は3つの調査と補足データにより構成される。

### 1. 調査1の方法

調査1では参与観察を行い記録した。実際のボランティア現場での活動内容と施設での活動内容を記録し、行動変容を明らかにした。研究者は盲養護老人ホーム入所者がボランティア活動を行う、全ての地域交流カフェに同行し、その活動の内容を記録するとともに、参加者の様子を観察した。また、日常のM盲養護老人ホーム内での様子も合わせて観察した。

調査期間は平成27年2月から平成28年7月までである。

### 2. 調査2の方法

M盲養護老人ホームに入所している視覚障害高齢者のうち、あんまマッサージ指圧師の国家資格を有し、施設入所以前の職歴としてマッサージを生業としていた者は49名中14名、そのうちボランティア活動が可能な10名により、マッサージボランティアのサークルを立ち上げた。

本調査では、ボランティア活動に参加した者のうち、インタビュー可能な8名について、研究内容を口頭で説明し同意を得たうえで、リラックスできる空間である本人の居室において、研究者と1対1の半構造化インタビューを行った(資料1参照)。ボランティア活動開始前と開始後の2回、インタビューを実施した(表1)。

8名のうち6名については、第1回目のインタビューを平成27年1月に、第2回目は平成28年3月に行った。残りの2名については、第1回目のインタビューを平成27年7月に、第2回目を平成28年7月に行った。活動開始以前と開始後の2回インタビュー調査を実施した(表2)。

インタビュー内容は了承を得て録音し、音声データを書き起こし逐語録を作成した。作成した逐語録から研究目的に関連した語りを抽出し、要約して中心的意味とした(資料3、資料4参照)。次に類似性のある中心的意味をまとめて、サブテーマとし、更にサブテーマの類似性を見ながら抽象度を上げてテーマとした。1回目と2回目の語りそれぞれに中心的意味、サブテーマ、テーマを表と関連図にした。表や関連図を丁寧に見ながら変化の過程を整理した。

表1. 質問項目

第一回目 (ボランティア活動開始前)	1. 現在の生活の印象 2. ボランティア活動について 3. 施設での対人関係 4. 今後の希望と不安
第二回目 (ボランティア活動開始後)	1. 現在の生活の印象 2. ボランティア活動について 3. 地域での対人関係 4. 今後の希望と不安

表 2. 対象者属性

	性別	年齢	視覚障害	入所期間	参加回数	インタビュー時期
A氏	女性	80代	1級	25年	4回	第1回 H.27.1
B氏	女性	70代	1級	12年3ヶ月	10回	第1回 H.27.1 第2回 H.28.3
C氏	女性	70代	3級	2年3ヶ月	5回	第1回 H.27.1 第2回 H.28.3
D氏	男性	80代	1級	10ヶ月	10回	第1回 H.27.7 第2回 H.28.7
E氏	男性	70代	1級	2年2ヶ月	21回	第1回 H.27.1 第2回 H.28.3
F氏	男性	70代	1級	8年7か月	17回	第1回 H.27.1 第2回 H.28.3
G氏	女性	70代	1級	7年4か月	21回	第1回 H.27.1 第2回 H.28.3
H氏	男性	80代	1級	1年1ヶ月	3回	第1回 H.27.7 第2回 H.28.7

### 3. 調査3の方法

本調査では、研究フィールドである M 盲養護老人ホームにおいて、身体的自立を獲得したのちのボランティア活動での地域交流が、盲養護老人ホーム入所者にもたらす変化の過程を明らかにする為、M 盲養護老人ホームが自立支援介護を取り入れた、平成 25 年度当時から本研究調査期間中まで、連続して勤務していた盲養護老人ホーム職員に対して、活動開始時点から活動後の一連の入所者の変化の様子と周囲の変化の様子について、ボランティア活動開始後にインタビュー調査を実施した（表 3）。

M 盲養護老人ホーム職員で、研究内容を口頭で説明し同意を得た 2 名（表 4）に対し、施設において研究者と 1 対 1 の半構造化インタビューを行った（資料 2 参照）。インタビュー内容は了承を得て録音し、音声データを書き起こし逐語録を作成した。作成した逐語録から研究目的に関連した語りを抽出し、要約して中心的意味とした（資料 5 参照）。次に類似性のある中心的意味をまとめて、サブテーマとし、更にサブテーマの類似性を見ながら抽象度を上げてテーマとした。1 回目と 2 回目の語りそれぞれに中心的意味、サブテーマ、テーマを表と関連図にした。表や関連図を丁寧に見ながら変化の過程を整理した。

表 3. 質問項目

項目	詳細内容
1. ボランティア活動に参加された入所者の以前の様子とその後の変化	・ボランティア活動をする前の様子 ・活動参加時の様子 ・活動後の変化
2. 施設での自立支援介護の取り組みについて	・自立支援介護についての思い ・自立支援介護の成果
3. 今後への期待	・今後へ期待すること

表 4. 対象者属性

	性別	年齢	職種	在職期間	インタビュー時期	インタビュー時間
I職員	男性	40代	主任生活支援員	12年	H.28.6	22分05秒
J職員	女性	50代	生活支援員	14年	H.28.6	34分14秒

※調査 2 と調査 3 のデータの収集と分析については、先行研究である市川・岩下の「軽費老人ホーム居住者が行う認知症デイ利用者との交流・支援活動についての一考察」の分析方法を参考とした。

研究者はこの研究の期間中、本研究のフィールドである盲養護老人ホームに施設長として勤務していたことから、インタビュー対象者以外の職員の入所者への関わりや、意見、ボランティア活動に参加している入所者への研究者自身のかかわりなども、補足するデータとして活用した。

#### 4. 倫理的配慮

調査実施にあたり、対象者に対し研究について口頭で事前に説明し承諾を得た。対象者から承諾が得られない場合はインタビューを実施せず、対象者が同意を拒否しても問題がなく、何ら不利益を被ることが無いことを事前に伝えた。インタビュー終了後、録音音声データは逐語録テキストデータ化し、音声データは破棄した。逐語録製作にあたり、対象者について特定が可能な情報の部分は完全に匿名化した。分析は匿名化したテキストデータのみを対象に行い、対象者の個人情報が増えいすることがないようにした。また、テキストデータ化、分析には暗証番号入力が必要なパソコンを使用し、データ統計後は速やかにすべてのデータを破棄した。また、ボランティア活動を行う地域カフェの開催される公共施設においても、責任者に研究の説明を行ったうえで承諾を得て記録を行った。

本調査は、事前に国際医療福祉大学倫理審査委員会より承認を得た（承認番号 14-lg-13）。

### Ⅲ. 結果

#### 1. 調査 1

参与観察の記録より、盲養護老人ホーム入所者によるボランティア活動の詳細を、表 5 に表した。

表 5. 盲養護老人ホーム入所者によるボランティア活動

<b>H.26</b> ~	※免許再交付申請		
<b>H.27.1</b>	※施設改築のため F 市内 M 区から H 区(仮施設)に移転		
<b>H.27.1</b>	※インタビュー(開始前) A氏B氏C氏E氏F氏G氏		
<b>H.27.2</b>	I 校区地域カフェ	参加者 6 名	施術者 8 名
<b>H.27.3</b>	I 校区地域カフェ	参加者 5 名	施術者 14 名
<b>H.27.4</b>	I 校区地域カフェ	参加者 7 名	施術者 21 名
<b>H.27.5</b>	I 校区地域カフェ	参加者 5 名	施術者 18 名
<b>H.27.6</b>	※ボランティア参加者間での自主的な勉強会開催		
	I 校区地域カフェ	参加者 4 名	施術者 19 名
<b>H.27.7</b>	※インタビュー(開始前) D氏H氏		
	※ボランティアサークル T シャツ作成		
	I 校区地域カフェ	参加者 4 名	施術者 22 名
	R 公民館	参加者 3 名	施術者 5 名
<b>H.27.8</b>	I 校区地域カフェ	参加者 5 名	施術者 18 名
<b>H.27.9</b>	I 校区地域カフェ	参加者 6 名	施術者 20 名
	※参加者お食事会		
<b>H.27.10</b>	I 校区地域カフェ	参加者 4 名	施術者 18 名
<b>H.27.11</b>	I 校区地域カフェ	参加者 5 名	施術者 17 名
<b>H.27.12</b>	※施設改築完了により M 区に移転 (個室化)		
	I 校区地域カフェ	参加者 6 名	施術者 23 名
<b>H.28.1</b>	※自主勉強会開催 ※A 氏死去		
	I 校区地域カフェ	参加者 5 名	施術者 20 名
	J 公民館	参加者 3 名	施術者 9 名
<b>H.28.2</b>	I 校区地域カフェ	参加者 7 名	施術者 18 名
<b>H.28.3</b>	※インタビュー(活動後) B氏C氏E氏F氏G氏		
	I 校区地域カフェ	参加者 5 名	施術者 24 名
<b>H.28.4</b>	I 校区地域カフェ	参加者 6 名	施術者 26 名
	※参加者お食事会		
<b>H.28.5</b>	I 校区地域カフェ	参加者 4 名	施術者 19 名
<b>H.28.6</b>	※インタビュー(職員)		
	I 校区地域カフェ	参加者 5 名	施術者 21 名
<b>H.28.7</b>	※インタビュー(活動後) D氏H氏		
	I 校区地域カフェ	参加者 6 名	施術者 22 名
	J 公民館	参加者 2 名	施術者 10 名

## 2. 調査2

### (1) 盲養護老人ホーム入所者がマッサージによるボランティア活動を開始する前

ボランティア活動開始以前の盲養護老人ホーム入所者へのインタビューの逐語録を分析したところ、59の中心的意味、14のサブテーマから、11のテーマが抽出された(表6)。それらに関連図に表した(図1)。

以下、テーマを【】、サブテーマを〈〉、中心的意味を“1.~60”、語りを「」で示す。

表6. ボランティア活動以前

中心的意味	サブテーマ	テーマ
1. 入所前は寂しくて不安だった 2. 家に籠っていた 3. 色々悩んでいた	不安な生活	入所以前の生活
4. 家では何不自由なく暮らしていた 5. 周りの人に恵まれて幸せだった	充実した生活	
6. 気を使う 7. 話ができない 8. 陰口を言われる 9. 妬んだりする人がいる 10. 人間関係に嫌なことがある 11. 職員にも合う人と合わない人がいる		人間関係に苦勞する
12. 言っても変わらない 13. 時間がたてば慣れた 14. 集団生活なので仕方ない 15. 表面的に付き合う		集団生活に妥協する
16. 入所して楽になった 17. 何の心配も要らず安心 18. 何も不自由がない	楽になった	施設に入所して良かった
19. 友人がいる 20. たくさん人がいるので寂しくない	寂しくない	
21. 職員が優しい 22. 職員には何でも話せる	職員への信頼	
23. 読書が楽しみ 24. 遊歩道を歩くことが楽しみ 25. 体を動かすことが楽しみ	個人での楽しみ	日常の楽しみ
26. 親戚が訪れること 27. 行事が楽しみ 28. 人の世話をするのが好き	人と接するのが楽しみ	
29. 参加に乗り気ではない 30. 急に言われて引き受けた 31. 部屋に籠っていても仕方ないので行ってみよう	誘われたので参加する	ボランティア活動参加の動機
32. 役に立てたらと引き受けた 33. 慣れているので快く承諾した 34. 毎日でも参加したい 35. どんどんしてほしい	積極的に参加したい	

表 6. 続き

中心的意味	サブテーマ	テーマ
36. 初めてなので不安	出来るかどうかの不安	ボランティア活動参加への不安
37. 自分の年齢が不安		
38. プランクが心配		
39. 迷惑を掛けないか不安	患者さんがどう思うか不安	
40. 白衣で施術しなくていいか		
41. 施術しながら上手く話せるか不安		
42. 気に入ってもらえるかわからない		
43. みんなに嫌にならないでほしい	一緒に参加する人への不安	
44. 人と接することに不安はない		ボランティア活動への自信
45. 昔はいっぱい患者さんをもっていた		
46. 自分のできる範囲のことだと嫌ではない		
47. マッサージをすることに不安はない		
48. 自分の為になる		ボランティア活動への期待
49. 色々な話ができる		
50. 喜んでもらえたら嬉しい		
51. みんなに参加してほしい		
52. 他にできることは思いつかない		他のボランティア活動への意欲
53. マッサージ以外できるかわからない		
54. 買い物に行きたい	生活の中でしたいこと	今後の生活への希望
55. スポーツがしたい		
56. 山登りがしたい		
57. 元気でいたい	今のままがいい	
58. したいことはない		
59. 今の暮らしに満足している		

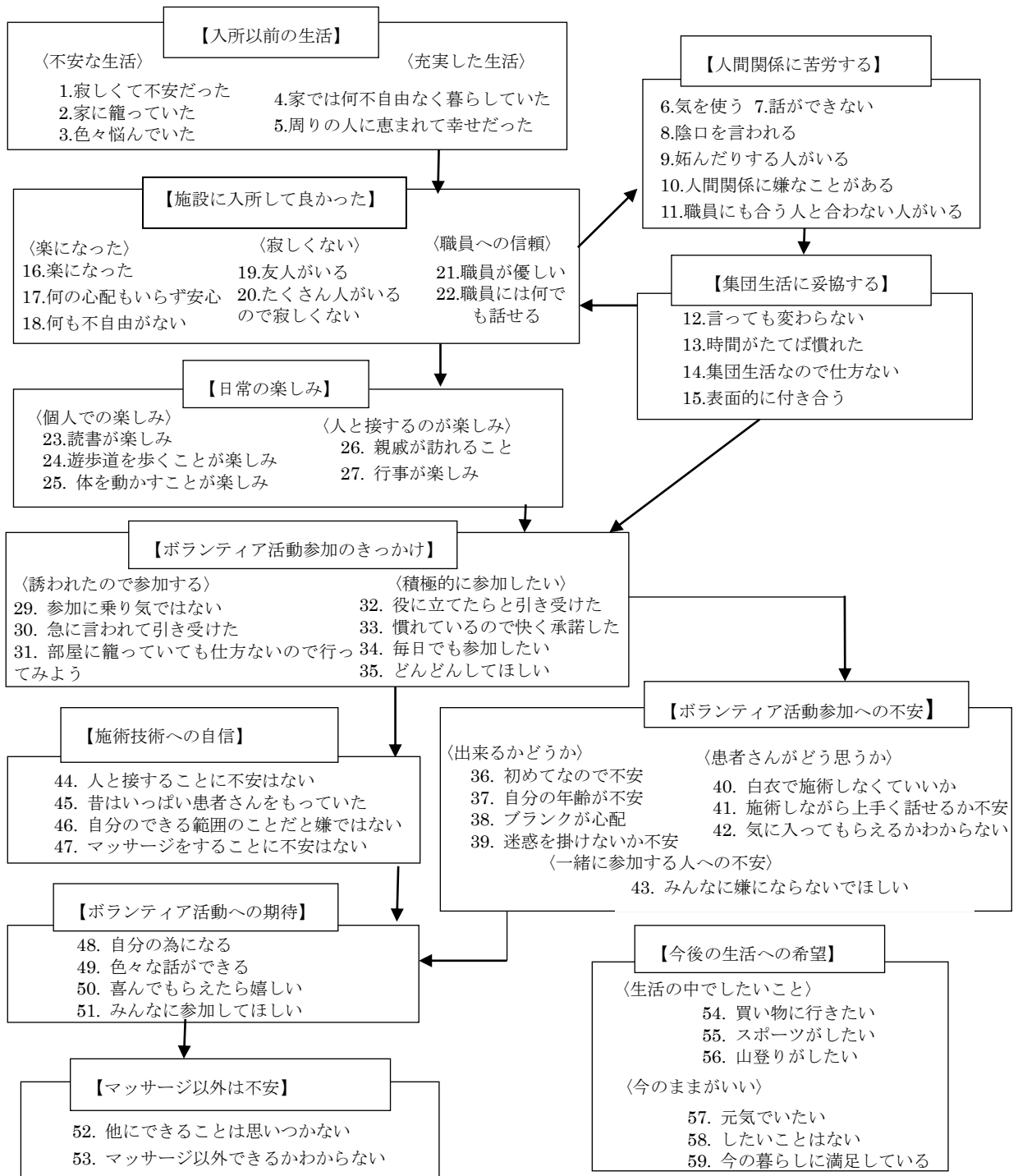


図1. 盲養護老人ホーム入所者のボランティア活動開始前の関連図

盲養護老人ホーム入所者の施設入所の経緯はそれぞれであり、その【入所以前の生活】についても、〈不安な生活〉であったと語られたり〈充実した生活〉であったと懐古されたりと様々である。在宅から施設への生活環境の変化の中で、【人間関係に苦勞する】ものの、施設ではいろんな人と一緒に生活しなくてはならないのだと、【集団生活に妥協する】している。その一方で、生活が〈楽になった〉、周囲に人がいることで〈寂しくない〉し、施設の〈職員への信頼〉から【入所して良かった】と感じている。

施設での生活の中で【日常の楽しみ】は、読書や散歩といった〈個人での楽しみ〉や、親しい人の訪れや、施設に入所しているからこそ体験できる行事などで〈人と接するのが楽しみ〉であるとされ、生活圏としての施設の枠を超えるものではなかった。

そんな中での、施設から離れて地域で行う【ボランティア活動参加の動機】は、職員からの参加への声掛けに対し、〈誘われたので参加する〉といった消極的なものと、ある程度の理解を持って〈積極的に参加したい〉という人がいた。しかし初めての活動に対して、マッサージを施術するという自体に〈出来るかどうか不安〉を感じていたり、マッサージをする〈患者さんがどう思うか不安〉だと反応を気にされていたり、一度活動して嫌になってしまう人がいたらどうしようと、〈一緒に参加する人への不安〉を持たれている人もいた。ただ、不安を持ちながらも、マッサージに関しては長年の経験と実績から、【活動への自信】を持たれていると同時に、【活動への期待】も持たれていた。ただし、まだ活動開始前であることから、マッサージ施術ではない【他のボランティア活動への意欲】は、ほぼ無い様子であった。【今後の生活への希望】については、日常生活の延長としての〈生活の中でしたいこと〉を挙げられる一方、〈今のままがいい〉といった消極的なものにとどまっている。

以下はテーマごとに、盲養護老人ホーム入所者の語りを引用しつつ説明する。

#### 【入所以前の生活】

盲養護老人ホーム入所者は、それまで同居していた身内との死別や、仕事からの引退による社会的役割の喪失から“1.入所前は寂しくて不安だった”と感じていたり、視覚障害というハンデから“2.家に籠っていた”り、“3.色々悩んでいた”と〈不安な生活〉だったと語る人もいれば、住み慣れた“4.家では何不自由なく暮らしていた”し地域の中で“2.周りの人に恵まれて幸せだった”と〈充実した生活〉を送っていた人も、同じように自身の身体能力の低下への懸念や、同居人等の介護者が不在になったことで入所に至っている。

#### 【人間関係に苦勞する】

盲養護老人ホーム入所者は、施設での集団生活の中で、周りの人に“6.気を使う”ことがあったり、他の入所者となかなか“7.話ができない”と悩んだり、他の人から“8.陰口を言われる”ことがあったり、なかには“9.妬んだりする人がいる”等、“10.人間関係に嫌なことがある”と不満を感じている。また、施設の中で避けられない施設職員との関係についても〈会う人と合わない人がいる〉と感じている。

#### 【集団生活に妥協する】

集団生活においては、周囲の人は“11.言っても変わらない”し、施設入所当初は戸惑っていたが、“12.時間がたてば慣れた”と受容した様子や、人間関係について“13.集団生活なので仕方ない”とあきらめて、“14.表面的に付き合う”ようにしていると、周囲の環境の変化へそれぞれ適応し



ていった様子が分かる。

#### 【施設に入所して良かった】

盲養護老人ホーム入所者は、施設に入所したことに、入所前の介護者に対して“感謝している”が気を遣っていたことや、家族関係や自身の健康について“色々悩んでいた”ことが入所して“解消した”として“15.入所して楽になった”と感じている。また、金銭的な不安が解消したことや、“死ぬまでいれる場所”であるという安住の場であるという認識から、“16.何の心配も要らず安心”だと語っている。施設では視覚障害に配慮された設備による自立性の確立と、専門性を有する職員に何でも“任せていいので”、“17.何も不自由がない”と感じている。また、施設の中に“18.友人がいる”ことや“19.たくさん人がいるので寂しくない”という、前述の集団生活における人間関係への不安の反面、ピアサポート的な人間関係を築けたことを“良かった”ことだとしている。

#### 【日常の楽しみ】

盲養護入所者に日常生活における楽しみについて尋ねたところ、音声図書による“23.読書が楽しみ”だったり、単独で一般道路を歩行することが難しい入所者が自由に屋外を散策できるよう、安全性を考慮して施設の周りに整備された“24.遊歩道を歩くことが楽しみ”だったり、“洗濯したり布団を干す”等の生活自体で“25.体を動かすことが楽しみ”であると、施設内での限られた空間ではあるものの、安全な環境下で〈個人での楽しみ〉を見出していることが分かった。また、面会に“26.親戚が訪れること”、施設で行われる誕生会等の“27.行事が楽しみ”だと他の入所者との交流や、普段から“28.人の世話をするのが好き”だと、〈人と接することが楽しみ〉だとしている意見も見られた。

#### 【ボランティア活動参加の動機】

ボランティア活動への参加の呼びかけは、マッサージの免許を所持されている方に対して、職員から個別に行われた。その際施設の外に出ることに“このごろ出不精になった”ので“29.乗り気ではない”が、職員に“30.急に言われて引き受けた”や、“31.部屋に籠っていても仕方ないので”と〈誘われたので参加〉を決めたという消極的な参加動機と、少しでも“32.役に立てたら引き受けた”とボランティア活動への意欲が見られたり、マッサージの施術という、専門性を発揮できる活動に“33.慣れているので快く承諾”したり、〈積極的に参加したい〉という前向きな姿勢とに分かれた。後者の中には“遊んでいるなら”“34.毎日でも参加したい”とリタイア後の生活を持て余しての意欲の発露が見られる。また、“いいこと”だから“35.どんどんして欲しい”とボランティア活動に対する理解も伺われた。

#### 【ボランティア活動参加への不安】

ボランティア活動という新しい活動への戸惑いを“36.初めてなので不安”であったり、“37.自分の年齢が不安”であると高齢からの体力的な不安を持っていたり、“38.blankが心配”だと、入所してからの年月により、社会活動から遠ざかっていたことからの不安があったり、施設の外、初めての場所に同行する職員や周囲の人に“39.迷惑を掛けたくないか不安”であったりとボランティア活動自体が〈出来るかどうかの不安〉を語る一方、マッサージを行うことについて“40.白衣で施術しなくていいか”と施術への専門家としての身だしなみや、“41.施術しながら上手く話せるか不安”だと施術対象者にサービスを提供することに対して、“42.気に入ってもらえるかわから

ない”といった〈患者さんがどう思うか不安〉であるという、プロ意識からの、施術を“ちゃんとしたい”という思いからくる不安があった。また、活動に参加する他の入所者に対して“43. みんなに嫌にならないでほしい”と思っている人は、このボランティア活動に理解があり、進んで参加され活動の継続を望んでいることから、自身以外の参加者が活動をやめられてこの活動自体がなくなることによって不安を持っていた。

#### 【ボランティア活動への自信】

もともとの職歴が“人と接する仕事だった”ので“44.人と接することに不安はない”から、ボランティア活動に対して“いいですよ”と意欲を見せたり、“45.昔はいっぱい患者さんをもって”ことで自信を示したり、“46.自分でできる範囲のことだと嫌ではない”と話したり、“47. マッサージをすることに不安はない”と、ボランティア活動において、自身の経験を生かしたマッサージの施術に関してだからという、不安ではなく自信が見られた。

#### 【ボランティア活動への期待】

参加することに対する期待としては、“自分の体のためにも一番いい”からと、“48.自分の為になる”のではないかと、施設の外に出て活動すること自体に期待したり、“49.色々な話ができる”と人とのふれあいに期待を持ったり、“揉んでもらって気持ちよかった”と言ってもらえたらと、施術者が“50.喜んでもらえたら嬉しい”と奉仕の代償としての自己有用性の獲得への期待も見られた。また、他の入所者“51.みんなに参加してほしい”と自身のみではなく、今後の施設全体での活動への期待も示していた。

#### 【他のボランティア活動への意欲】

活動前ということもあり、マッサージ以外のボランティア活動に関しては、“52.他にできることは思いつかない”し、“53.マッサージ以外できるかわからない”と、ほぼ全員が意欲を示されることはなかった。

#### 【今後の生活への希望】

今後の生活について望むこと、希望については、“54.買い物に行きたい”や“55.スポーツがしたい”“56.山登りがしたい”といった〈生活の中でしたいこと〉があがった、また、このまま“57.元気でいたい”と健康面に関することや、特に“今のところ”“58.したいことはない”“59.今の暮らしに満足している”と現状への妥協的な満足からか、“60.将来のことは考えない”といった〈いまのままがいい〉という消極的なものであった。

(2) 盲養護老人ホーム入所者がマッサージによるボランティア活動を開始した後

ボランティア活動開始後の盲養護老人ホーム入所者へのインタビューの逐語録を分析したところ、56の中心的意味、18のサブテーマから、12のテーマが抽出された(表7)。それらを関連図に表した(図2)。

以下、テーマを【】、サブテーマを〈〉、中心的意味を“1.~56.”、語りを「」で示す。

表7. ボランティア活動後

中心的意味	サブテーマ	テーマ
1. 昔は病気がちだった		在宅生活での限界
2. 在宅では活動に制限があった		
3. 運動もできないから体が弱る		
4. 人の付き合いが不安定	人づきあいが面倒	集団生活の不満
5. 他の入所者の不満を耳にする		
6. 施設内の音がうるさい	音がうるさい	
7. 気を使わなくていい	気楽に過ごせる	入所して良かった
8. 自由にできる		
9. 安心していられる	安心感がある	
10. 職員が親切		
11. 行事など色々あって楽しい	人とのふれあいが楽しい	
12. 他の入所者が優しい		
13. 職員が忙しい		職員への不満
14. 職員とゆっくり話すことができない		
15. 職員に平等に接してほしい		
16. 行事が楽しみ		イベントが楽しい
17. 外出が楽しみ		
18. 腰が痛くなかったらもっと参加したい		ボランティア活動参加への意欲
19. 苦にならずに参加できる		
20. いつでも参加したい		
21. 考えると言葉がつまってしまう	思ったようにできない	思ったようにできないジレンマ
22. 施術の時間が長くなってしまふ		
23. 以前のように体が動かない		
24. 施術の時間に不満を言われる		
25. 針をしたいが問題がある		
26. マッサージなら問題ない	経験からの自信	取り戻した自信
27. コツを思い出す		
28. 指の感覚が残っている		
29. 経験が長いのでコツがある		
30. 久しぶりに仕事の感覚を感じる		
31. 外に出られるのがいい	施設の外に出る	ボランティア活動での喜び
32. 気分が変わっていい		
33. 息抜きになる		
34. いろんな人と話せて勉強になる	人と話すのが楽しい	
35. 話をするのが楽しみ		
36. 満足してもらっている	施術への満足	
37. 継続して来てくれる		
38. マッサージを知ってもらってよかった		
39. 喜ばれるので嬉しい	喜ばれることが嬉しい	
40. お礼を言ってくれる		
41. またお願いと言ってもらえる		

表 7. 続き

中心的意味	サブテーマ	テーマ
42. 参加の回数が物足りない	物足りないが仕方ない	マッサージの専門性の追求
43. 時間的に物足りない		
44. ボランティアなのでこの程度		
45. 施術の時間を合わせたい	よりよい活動にしたい	
46. あまり手を抜きたくない		
47. 他の人と協力して活動したい		
48. マッサージしかできない	マッサージしかできない	他のボランティア活動への意欲
49. マッサージがいい		
50. 他のボランティアもしてみたい	他の活動もしてみたい	
51. 旅行に行きたい	個人的な希望	今後の生活への希望
52. 元気でいたい		
53. 他の入所者にもっと活動してほしい	周囲の変化を期待する	
54. 積極的になってほしい		
55. 今の暮らしが続けばいい	現状の継続を望む	
56. もう年なので欲しいものは無い		

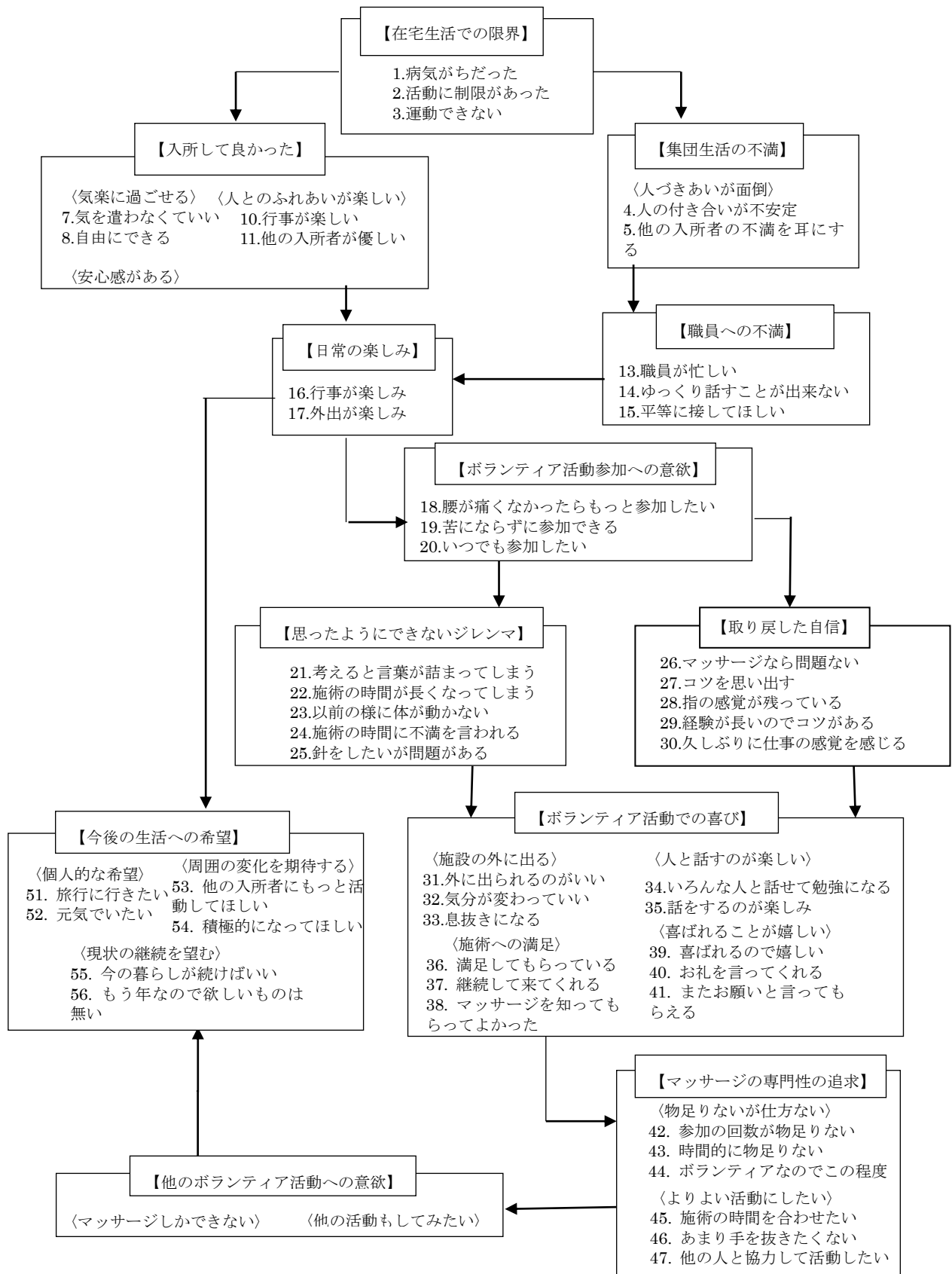


図 2. 盲養護老人ホーム入所者のボランティア活動後の関連図

盲養護老人ホーム入所者は、行動の制限など【在宅生活の限界】を感じて入所した施設において、施設での生活に【集団生活の不満】を持ちつつも、安心や気ままさや、人とのふれあいに【入所してよかった】と思っている。【職員への不満】については、忙しいことへの理解を持ちながらも、接する時間の短さや対応の不公平さを感じて改善を望んでいることが分かった。その生活の中では外出や行事を【日常の楽しみ】としている。

ボランティア活動へは、比較的【参加への意欲】を持っているが、【ボランティア活動参加の実際】は、想像と違い〈思ったようにできない〉というジレンマを持ちつつも、長い〈経験からの自信〉を持って施術している。活動で〈施設の外に出る〉こと自体に息抜きや気分転換の意味での喜びを感じている一方、マッサージを行う地域の人との交流や、満足や感謝の言葉を受ける〈相手に対する喜び〉を見出している。その中で時間の制限や活動の頻度について〈物足りないが仕方ない〉としているものの、〈よりよい活動にしたい〉という【活動内容を向上させる】意欲が出現している。

【今後の生活への希望】として、自身の健康や活動に対する〈個人的な希望〉を述べる一方、生活している施設全体について〈周囲の変化を期待する〉といった、人間関係をよりよくしていきたいという希望が見られた。

以下はテーマごとに、盲養護老人ホーム入所者の語りを引用しつつ説明する。

#### 【在宅生活での限界】

盲養護老人ホーム入所者は、入所前の生活を施設で暮らす現在と比べて、“1.昔は病気がちであった”が、今は“病院につれていって”もらっても“どうも悪いところは無い”と健康な生活の獲得を感じていた。また、視覚障害という特性上“家にいたら色々できない”ことがあり“2.在宅では活動に制限があった”とし、“3.運動もできないから体が弱る”が、施設では整備の整った遊歩道を使つての日々の歩行や、ラジオ体操等のレクリエーションに参加することで、体を動かせるということに充実感を感じている。

#### 【集団生活の不満】

施設と在宅での環境の差のもっとも大きなものは、集団生活であるということである。同じ建物の中で多くの部分を共有することで、地域の付き合いよりはより密で接近した関係が生まれる、その中で“4.人の付き合いが不安定”であることや、“5.他の入所者の不満を耳にする”ことが自身にとってもストレスに感じるといった〈人付き合いが面倒〉だということが施設生活に対する不満として表れている。また、他の入所者の生活音や話し声が聞こえることに、“6音がるさい”という不満を示す人もいた。

#### 【入所してよかった】

施設の利点については、“在宅では気を遣っていたが”施設ではそれが無くなり、改築後の居室が一人部屋となったこともあり、“7.気を使わなくていい”と気分的に楽になったこと、また“8.自由にできる”といったように、〈気楽に過ごせる〉ことをあげた。またそこには設備の面でも、職員や他の入所者の存在に“9.安心感がある”とし、“10.職員が親切”だと〈安心感がある〉ことが大きな理由であると言える。その中で、施設という集団生活ならではの催し等に参加できることに対して、“11.行事など色々あって楽しい”と楽しみを持っていたり、“12.他の入所者が優しい”と〈人とのふれあいが楽しい〉と感じていることも分かった。

### 【職員への不満】

施設での生活の中で、避けられない人間関係としては、職員との関係が挙げられる。入所者の職員に対する“13.職員が忙しい”ので“14.職員とゆっくり話すことができない”と言った、もっと関わりを持ちたいという不満や、“15.職員に平等に接してほしい”と言った不満があがった。

### 【イベントが楽しい】

施設生活ならではの“16.行事が楽しみ”であったり、また日常でささやかながら“17.外出が楽しみ”だとしている。

### 【ボランティア活動への意欲】

ボランティア活動について、“18.腰が痛くなかったらもっと参加したい”と、意欲的な発言がみられるようになった。また、“19.苦にならず参加できる”ので、“20.いつでも参加したい”といったように、継続した活動への参加の意欲が見られている。

### 【思ったようにできないジレンマ】

ボランティア活動に参加した感想については、施術を行う相手に対して、マッサージ中の会話が“21.考えると言葉が詰まってしまう”ので、会話が続かないことを心配し、相手に対してより良いサービスを提供することを考えていることが分かる。また“考えてしまうと”“22.施術の時間が長くなってしまう”ことや、“23.以前のように体が動かない”ので満足してもらえているか、“24.施術の時間に不満を言われる”ことで、不本意な思いをしたり、もっと良い施術の為に“25.針をしたいが問題がある”と、〈思ったようにできない〉といった悩みを語っている。

### 【取り戻した自信】

活動について“26.マッサージなら問題ない”と自信を持って参加していたり、現役の頃の“27.コツを思い出す”こと、“28.指の感覚が残っている”と自信を持ち、“29.経験が長いのでコツがある”と経験値への自信が見られた。また“30.久しぶりに仕事の感覚を感じる”ことがやりがいになっていて、〈経験からの自信〉が感じられた。

### 【ボランティア活動での喜び】

ボランティア活動に参加することで施設の“31.外に出られるのがいい”であるとか、“32.気分が変わっていい”“33.息抜きになる”と、〈施設の外に出る〉こと自体を楽しみにしている。また、“34.いろんな人と話せて勉強になる”とボランティア活動で触れ合う人と“35.話をするのが楽しみ”であるとして、〈人と話すのが楽しい〉と施設の中に限られた人間関係とは違い、多様な人との触れ合いについて喜びとしている。更に施術を行う相手に対して“36.満足してもらっている”と感じることや、開催の度に“37.継続してくてる”ことで、顔なじみとなっていること、また“38.マッサージを知ってもらってよかった”と〈施術への満足〉感に喜びを感じられていて、ここから“39.喜ばれるので嬉しい”“40.お礼を言ってくれる”“41.またお願いといってくれる”と〈喜ばれることが嬉しい〉と感じている。

### 【マッサージの専門性の追求】

“42.参加の回数が物足りない”ともっと活動に参加したいという意欲や、施術に対して“43.時間的に物足りない”と、もっと納得いくような仕事をしたいというプロ意識が見られている。反面“44.ボランティアなのでこの程度”にしなくてはと〈物足りないが仕方ない〉という思いを持っている。その中でも他の参加者と“45.施術の時間を合わせたい”と相手に対して不公平感を

持たせたくないという思いや、ボランティアだと言っても“46.あまり手を抜きたくない”と、施術の質の高さに誇りをもって活動している様子や、“47.他の人と協力して活動したい”と他の参加者との連帯感を持ち、〈よりよい活動にしたい〉という主体的な意欲が現れている。

#### 【他のボランティア活動への意欲】

他の活動については、“目が見えないから”“48.マッサージしかできない”と、できることに限界を感じていることから、ボランティアを行うのであれば“みんなに喜んでもらえる”“49.マッサージがいい”としている。自信を持てる慣れた活動として、〈マッサージしかできない〉という人もいた。しかしこの活動によって、ボランティアに興味を持たれ、また、交流の更なる広がり期待することで、“50.他のボランティアもしてみたい”と、〈他の活動もしてみたい〉という意見も見られた。

#### 【今後の生活への希望】

活動を経験した後の今後の希望については、活動以前と変わらず“51.旅行に行きたい”や、“52.元気でいたい”という〈個人的な希望〉と、活動を体験し、それが良い経験になっていることから、“53.他の入所者にもっと活動してほしい”という周囲への期待を述べ、施設全体にもっと元気になってもらいたいと他の入所者に“54.積極的になってほしい”と〈周囲の変化を期待する〉との希望が見られた。しかし、“55.今の暮らしが続けばいい”や“56.もう年なので欲しいものは無い”と、やはり〈現状の継続を望む〉といった意見があった。



### 3. 調査3. 盲養護老人ホーム職員からみた変化

盲養護老人ホーム職員へのインタビューの逐語録を分析したところ、62の中心的意味、18のサブテーマから、13のテーマが抽出された(表8)。それらを関連図に表した(図3)。

以下、テーマを【】、サブテーマを〈〉、中心的意味を“1.~60”、語りを「」で示す。

表8. 盲養護老人ホーム職員からみた変化

中心的意味	サブテーマ	テーマ
1. 部屋から出てこない 2. 他の入所者の来室が迷惑 3. うちに籠るタイプだった	閉じこもりがち	活動前の集団生活になじめない様子
4. 他の入所者にイライラする 5. 口数が少ない 6. 表情が厳しい	上手く人付き合いできない	
7. 地元に帰りたいという訴えが多い	帰宅願望がある	
8. 物を盗られたという 9. 昔の知り合いの名前を呼ぶ 10. 認知症状がひどかった		
11. 快く参加を了承する 12. 拒否なく参加する 13. 活動後によかったと話す	快く参加する	ボランティア活動を楽しむ
14. 活動中笑顔や会話がよく見られる 15. 活動が楽しかったといわれる	活動を楽しむ	経験からの自信
16. 外に出ることで笑顔になった 17. 人に接することで笑顔になった	笑顔が増える	
18. いろんな情報を聞ける 19. 活動がいい刺激になっている 20. 施設を出ることで刺激を受ける	刺激を受けている	
21. マッサージに自信がある 22. 専門用語を話す 23. 他の入所者にアドバイスする		
24. 他の入所者にイライラしない 25. 部屋から出てみんなで過ごす時間が増えた 26. 会話が增えた 27. 発言が優しくなった	上手く人付き合いができるようになった	人間関係の改善
28. 他の入所者に優しくなった 29. 他の入所者のお世話をする 30. 困っている方に手を貸す	他の入所者を気遣う	見た目の変化
31. 身だしなみを気にするようになった 32. 服装が変わった 33. きちんとしようとする意識が強くなった	身だしなみに気を使うようになった	
34. 表情が柔らかくなった 35. 段々顔つきが変わってきた	表情が変化した	
36. 帰宅願望がなくなった	帰宅願望の消失	
37. 昔の知り合いの名前が出なくなった 38. 認知症状が軽減した	認知症状の改善	新たなコミュニティの発生
39. ボランティア参加者同士で会話が增えた 40. ボランティア参加者での交流が増えた		

表8 続き

中心的意味	サブテーマ	テーマ
41. 入所者の生き生きとした様子に感謝している 42. いい経験をされていると思う 43. 入所者の笑顔が見られて嬉しい 44. 施設の外に出ることがいいことだと思う		生き生きとした様子が見られることへの感謝
45. もっと地域交流に参加して欲しい 46. 他の入所者にもボランティア活動をしてほしい	他の入所者にももっと活動をしてほしい	活動の広がりへの期待
47. 生きる張り合いを持ってほしい 48. 外に出て明るく元気になってほしい	より充実した生活を送ってほしい	
49. 他の活動にも期待する 50. 他の入所者にも生き生きしてもらえらるのではと期待する	他にも活動が広がってほしい	
51. 他にも交流の場を増やしたい 52. 地域の交流ができる施設環境にしていきたい 53. 色々な活動の企画実現のために勉強したい		今後の取り組みへの意欲
54. 認知症がよくなった 55. 穏やかな生活を送られるようになった	自立支援介護によって生活が変わった	自立支援介護の効果
56. 自立支援介護の取り組み以前は施設に活気がなかった 57. 自立支援介護の取り組みがなければやる気が起きなかった 58. 自立支援介護によって活動の幅が広がった 59. 自立支援介護の取り組みがボランティア活動に繋がった	自立支援介護によって活気が生まれた	
60. 自立支援介護とボランティア活動によって入所者の活力が出た 61. 施設全体に活力が出た 62. 施設の外に出ることでやる気が出た		入所者の活力にあふれた施設

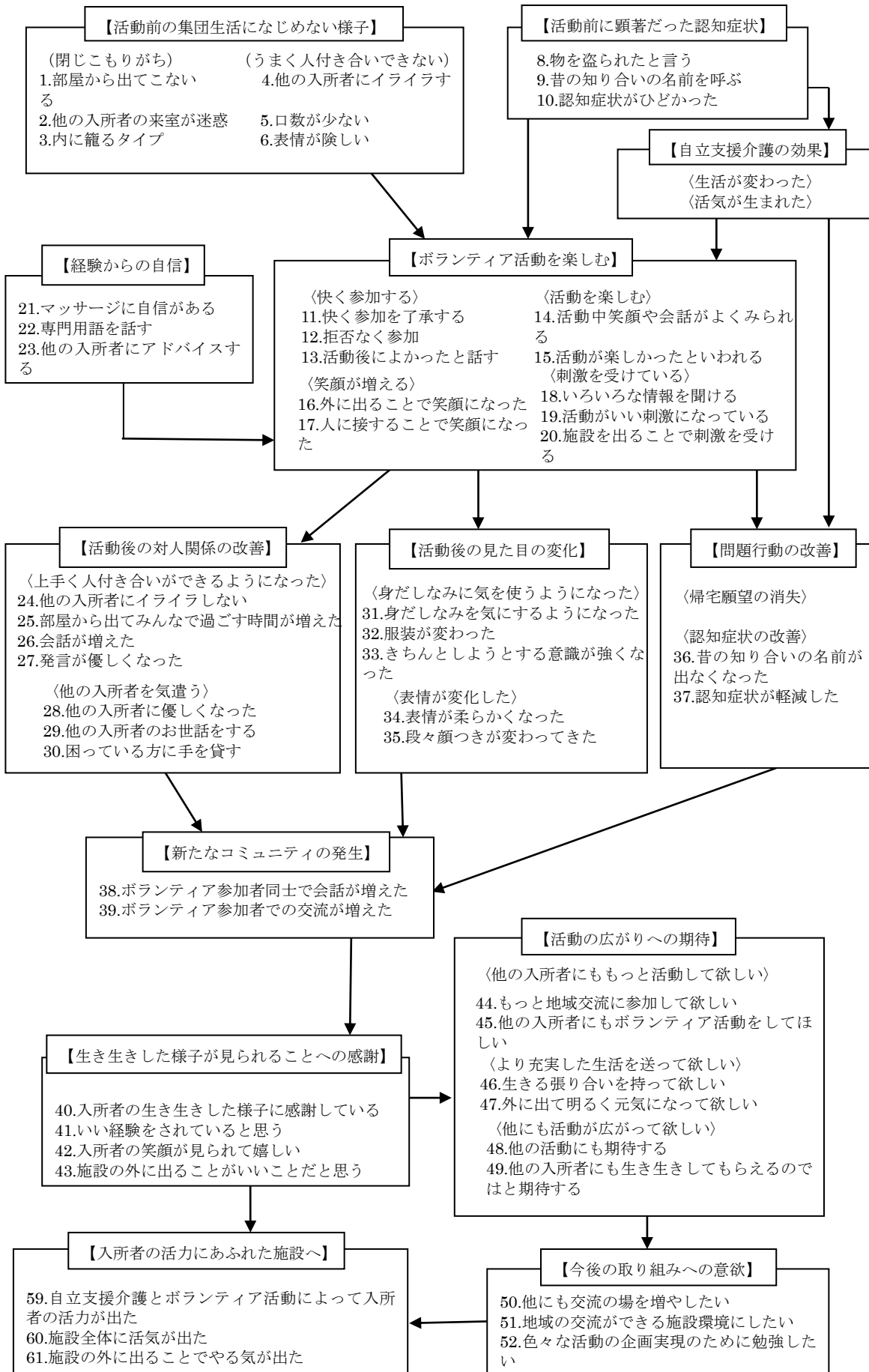


図3. 盲養護老人ホーム職員からみた変化の関連図

盲養護職員から見たボランティア活動が開始される以前の参加者には、〈部屋に閉じこもりがち〉だったり〈帰宅願望〉の訴えがあるなど、施設という【活動前の集団生活になじめない様子】が見られたり、中には【活動前に顕著だった認知症状】がみられた参加者もいた。活動が始まってからは、〈快く参加〉に応じる姿や、活動中の笑顔、また参加後の感想から【ボランティア活動を楽しん】でいる印象を受けている。その中でマッサージという入所以前の経験を生かした活動によって、職員には見せたことのなかった専門家の顔をのぞかせ【経験からの自信】を感じさせた。そして活動を通じて、盲養護職員は参加者が〈上手く人付き合いができるようになった〉と感じたり、以前には見られなかった〈他の入所者を気遣う〉姿に【活動後の人間関係の改善】を実感している。また【活動後の見た目の変化】をその表情や身だしなみで実感し、さらに〈認知症状の軽減〉など、【問題行動の軽減】を顕著に感じている。そして施設内にボランティア活動参加者による【新たなコミュニティの発生】が起こるのである。

参加者の変化を見た盲養護職員は、その様子に【生き生きとした様子がみられることへの感謝】を持ち、あらためてその経験がもたらす笑顔に喜びを感じている。それゆえ、この活動に参加していなかった他の入所者にも、何らかの活動への参加をしてほしいと【活動の広がりへの期待】を持っている。そしてそれは【今後の取り組みへの意欲】となった。

ここにいたるには、この施設で取り組んだ【自立支援介護の効果】がなくてはならないことに言及している。自立支援介護がなくてはこの活動は実現できなかったであろうとし、施設に活力が生まれ、生き生きと生活する入所者の姿を見て【入所者の活力があふれた施設へ】変わってきたと感じている。

以下はテーマごとに、盲養護老人ホーム職員の語りを引用しつつ説明する。

#### 【活動前の集団生活になじめない様子】

ボランティア活動に参加している入所者の中にも〈閉じこもりがち〉な、いわゆる過剰な自己防衛心理を持つ入所者がいたと盲養護職員は語っている。個室化によってプライバシーの確保は確立されたものの、その弊害として食事などの必要時以外は“1.部屋から出てこない”でいる入所者もいて、非社会的で閉鎖的な性格を有する B 氏は“2.他の入所者の来室が迷惑”だと訴え、他者からのアプローチを拒絶していた。このように何人かは活動開始以前“3.うちに籠るタイプ”であったと語っている。また、よく“4.他の入所者にイライラ”する様子が見受けられたり、“5.口数が少なく”他の入所者との交流もなかったり、いつも“6.表情が厳し”く、〈上手く人付き合いできない〉様子だった。また、入所期間が比較的短く“地元に戻りたいという訴えが多い” H 氏については、盲養護職員は“どうすれば施設に慣れてもらえるか悩んでいた”。

#### 【活動前に顕著だった認知症状】

盲養護老人ホームの入所は自立が前提であるが、入所期間が長い入所者の中には、さまざまな理由で要介護状態になる場合や、〈認知症状〉が出現する場合もあり得る。ここでは実際に認知症と診断を受けたということではなく、その症状が認知症の病状を表しているということの意であるが、ボランティア活動に参加した入所者にも“8.物を取られた”と頻繁に訴える物取られの妄想があったり、“9.他の入所者さんを昔の知り合いの名前で呼”んだりといった問題行動が見られていて、“10.認知症状がひどかった”入所者もいた。

### 【ボランティア活動を楽しむ】

活動開始後は盲養護職員による参加への声掛けに“11.快く参加を了承する”、“12.拒否なく参加する”入所者がほとんどであったが、中には「行く前は乗り気でなかった」ものの、ボランティア活動に参加して施設に帰ってから“13.よかったと話す”入所者もいた。その後は参加に対する拒否は見られず、〈快く参加〉していた。

活動中も普段より“14.笑顔や会話がよく見られ”て“15.活動が楽しかった”という言葉が聞けたことに職員は喜びを感じ、また施設を離れ“16.外に出ることで笑顔になった”こと、地域の人とのふれあいの中で今までとは違う“17.人と接することで笑顔になった”と、参加した入所者の〈笑顔が増える〉様子にも、この活動を楽しまれていることを感じている。地域の人との会話では、施設の中とは違う“18.いろんな情報を聞く”事が出来るし、“19.活動がいい刺激にな”って、**“20.施設を出ることで刺激を受け”**る事が大事だと感じている。

### 【経験からの自信】

このボランティア活動はマッサージの施術であるが、参加者は皆有資格者であって、ブランクの期間は様々であるが、“21.マッサージには自信がある”と〈経験による自信〉を持ち、専門性の提供という形でのボランティアに自信を覗かせていた。盲養護職員は、入所者の入所以前の職歴は把握していても、実際にマッサージをしている姿、患者に対する姿を目にするのは初めてのことであり、活動が続けるうちに“22.専門用語を話す”姿や“23.他の入所者にアドバイスする”姿に畏敬の念を抱いている。

### 【人間関係の改善】

人付き合いが苦手だった B 氏は“24.他の入所者にイライラしなく”なり、“25.部屋から出てみんなで過ごす時間が増えた”と語っている。その中で“27.会話が増え”たり、入所者間での会話でも“28.発言が優しくなった”と〈上手く人付き合いができるようになった〉とし、施設の日常生活の中で、“29.他の入所者に優しくなった”と感じている。以前はあまり見られなかった、「寂しそうにしている方に積極的に声をかけて一緒に歌を歌ったり、お話をし」たり、“29.お世話をする”様子が見られるようになった。「迷われている方にこっちですよって手を引いて案内」をするような“30.困った方に手を貸す”といった〈他の入所者を気遣う〉様子も見られている。

### 【活動後の見た目の変化】

活動を開始してからの参加者の様子に、職員は“31.身だしなみを気にするようになった”ことを発見する。普段からの施設での“32.服装が変わった”として、ボランティア活動に参加することによって、施設から地域に出て、「人に見られる」ことを意識し、“33.きちんとしようとする意識が強くなった”からではと推測し、〈身だしなみに気を使うようになった〉ことに驚いていた。また以前は「物を盗られた」等の言動が見られ、「表情が厳しかった」方が、“34.表情が柔らかくなった”り、施設の中の人だけではなく、「色んな情報を聞けて」“35.段々顔つきが変わってきた”と、〈表情が変化した〉ことにも気づいている。

### 【問題行動の改善】

活動開始前に帰宅願望の激しかった H 氏は、参加後にはその発言が聞かれることなく“36.帰宅願望がなくなった”。また「他の入所者さんを昔の知り合いの名前で呼ばれていた」入所者は、ボランティア活動参加後には“37. 昔の知り合いの名前はでなくなった”と人の認知障害の症状

の消失が見られている。また「物盗られ妄想があった」方に関してもその“38.認知症状が軽減した”と感じている。

#### 【新たなコミュニティの発生】

活動の開始から、職員は“39.ボランティア参加者同士で会話が増えた”ことに気付いている。また、参加者同士で活動の内容を話し合ったり、自主的に参加者の居室に集まってマッサージの勉強会を開かれたりと、“40.ボランティア参加者での交流が増えた”ことで、それまでは施設の中であまり接点のなかった参加者間で、新たなミニコミュニティが出来ている。

#### 【生き生きとした様子が見られることへの感謝】

盲養護老人ホーム職員は、この活動による前述のような“41.入所者の生き生きとした様子に感謝している”という感想を抱いていて、ボランティア活動について、参加者が“42.いい経験をされていると思”っている。ボランティア活動に出るときも、施設に帰ってきたときも“43.入所者の笑顔が見られて嬉しい”と感じていて、“44.施設の外に出ることがいいことだと思”っている。

#### 【活動の広がりへの期待】

ボランティア活動参加者の変化や「生き生きと」した様子を見た職員は、“45.もっと地域交流に参加してほしい”と思い、“46.他の入所者にもボランティア活動をしてほしい”と〈他の入所者にももっと活動をしてほしい〉と語った。他の入所者にも、“47.生きる張り合いを持ってほしい”し、“48.外に出て明るく元気になってほしい”と〈より充実した生活を送ってほしい〉と思っている。これはこのボランティア活動において、参加者のはっきりとした変化を目の当たりにし、マッサージができない他の入所者が参加できる“49.他の活動にも期待”していて、“50.他の入所者にも生き生きしてもらえるのではと期待する”もので、〈他にも活動がひろがってほしい〉と期待している。

#### 【今後の取り組みへの意欲】

ボランティア活動に参加された入所者の生き生きとした様子を見た職員は、“51.他にも交流の場を増やしたい”と、さらなる活動への意欲を示した。地域の交流での変化に、今回参加していない他の入所者も参加できるような環境を整えることを目標として、“52.地域の交流ができる施設環境にしていきたい”として、その実現の為に、自身のスキルの向上が必要であると、“53.色々な活動の企画実現のために勉強したい”と語っている

#### 【自立支援介護の効果】

研究フィールドである M 盲養護老人ホームでは、本研究に先駆けて、自立支援介護への取り組みを行っている。その成果として職員は、“54. 認知症が良くなった”り、“55. 穏やかな生活を送られるようになった”と入所者が〈自立支援介護によって生活が変わった〉と感じている。そして、“56. 自立支援介護の取り組み以前は施設に活気がなかった”ことから、今回の活動に関しても、“57. 自立支援介護の取り組みがなければやる気が起きなかった”のではないかと推測している。身体的自立性を獲得したことで“58. 自立支援介護によって活動の幅が広がった”として、“59. 自立支援介護の取り組みがボランティア活動につながった”のだと、〈自立支援介護によって活気が生まれた〉としている。

#### 【入所者の活力にあふれた施設】

活動を通じて盲養護老人ホーム職員は、“60.自立支援介護とボランティア活動によって入所者の活力が出た”と自立支援介護による身体機能の向上に伴い、“61.施設全体に活力が出た”と感じている。“62.施設の外に出ることでやる気が出た”と語っている。

#### IV. 考察

##### 1. 参与観察でみられた変化

調査 1 の参与観察によって明らかとなったボランティア活動による盲養護老人ホーム入所者の変化について考察を行った。

M 盲養護老人ホームでは、平成 25 年度から、竹内ら<sup>15)</sup>の提唱する理論に基づいた自立支援介護に取り組んでいる。これは身体的自立を目指して、水分 1500ml 以上の摂取、一日 1500kcal の食事、歩行による運動の実施、そして下剤に頼らない自然排便を目指すというものである。それにより、介護度の軽減と、介護予防による身体的自立の成果を上げている。

平成 27 年度に施設の老朽化に伴う建て替えが行われることとなり、建て替えの間、施設を H 区に移転することとなる。移転によっておこる環境の変化による入所者の混乱と認知症の発症が心配され、また建て替えによりそれまでの二人部屋から個室化への移行にあたり居室への閉じこもりが懸念されていた。そこで、入所者の介護予防と生きがいづくりのために、地域でのボランティア活動を行うことを計画した。その際、視覚障害というハンディキャップを逆に、地域に喜ばれるボランティア活動として、マッサージの施行があげられた。

最初に行ったのは「あはき法」に基づき、参加者のあん摩マッサージの免許証の再交付を行うことであった。施設入所以前にマッサージを生業としていた者は 49 名の入所者中 14 名、そのうちボランティア活動が可能な入所者 10 名でボランティアサークルを立ち上げた。免許証を手元に持つ者は 2 名のみで、ほとんどが入所時又は入所前に今後使用するとは無いだろうと、破棄、紛失してそのままになっていた。そこで、公益財団法人東洋療法研修試験財団に再発行の申請を行うことから開始した。同時にボランティアの受け入れ先を地区の社会福祉協議会の協力を得て広く呼びかけ、その中からまず I 地区の地域交流カフェへの参加を決定した。決定の理由としては、I 地区の地域交流カフェが立ち上がったばかりで、その第一回目から参加できることと、地区の事業所が多数参加して地域住民と連携をとって進めていることであった。ただ地域の事業所は場所の提供や送迎の車両提供、ボランティアとしての職員の派遣等で、事業所を利用している高齢者の参加はなされていなかった。そこで、M 盲養護老人ホームとしては、入所者が行うボランティアとして協力するという形で参加することを提案した。

参加の呼びかけには「出不精になった」ことや「初めてで不安」だからという理由で戸惑う入所者が多かった。今まで交流の無かった地域の集まりであり、特に晴眼者の人々の中で活動するということに、不安は大きかったと思われる。まずは地域交流カフェに気楽に遊びに行く感覚で一緒に行きましょうという職員の声掛けに、最初は、ほとんどの入所者が施設での行事の一環だという感覚で“普段は退屈している”ので“部屋に籠っていてもしかたない”と参加を決めている。普段施設での生活を退屈に感じている入所者が多いことが分かる。介護予防の観点から見た時に、上原<sup>16)</sup>が述べるように「健康と生きがい」が密接な関連を持ち、高齢者の生きがいに対する積極的な支援が将来的な介護予防につながることを考えると、その重要性看過することはできないはずであり、施設で安全と安心を確保し、身体的自立を獲得した入所者には、その上で「生きがい」を得られる活動の場が必要であると言える。また、ボランティア活動ということに対して、“喜んでもらえたら”や“役に立てたら”という理由で参加されている。斎藤<sup>17)</sup>が言う「相手の役に立つ」ことが生きがいにつながり、高齢期の適応の幅を広げることが期待できた。



最初の活動となった I 地区での地域交流カフェには、6 名が参加。初の試みということもあり、ブースに来られ施術を受ける一般参加者は少なく、まだ活動に対して戸惑いも見られるようであった。ボランティアとしての参加であったが、地域交流カフェそのものが来場者に募金をつのるという形式だったことから、マッサージの施術に対しても募金が集まった。毎回この募金をプールすることで、それまではボランティア活動参加者各自で白衣等を着用していたが、活動開始から 5 か月目にサークルのユニフォームとなる T シャツを製作することができた。また、参加者全員での食事会に行くことで、サークル内で交流と親睦が深まり、より活動に参加することの楽しみを得ることができた。本来は無報酬のボランティア活動であるものの、わずかながらもその活動による報酬を得ることが出来たということは、やりがいという参加者の継続意欲に大きくプラスとなったといえる。

平成 27 年 7 月には、その年度に新規入所した 2 名もボランティア活動に参加した。新規入所での環境の変化による混乱や不安を早期に解決することと、入所直前まで開業され就労していたことから、社会との関わりを継続させることで社会的役割の喪失による QOL の低下を最小限にすることを目指したものである。この 2 名の参加者のうち 1 名は、在宅時、老人性鬱症の診断を受けていた。県外からの入所ということもあり、当初は施設入所についてなかなか受容できず、施設的环境になじめない様子で、頻繁に退所の希望の訴えがあった。施設入所においては、この新たな生活の場への適応が、新規入所の際の支援として重点を置かれている。また、視覚障害者にとっては、全く新しい環境を視覚からの情報を得られない状態で適応していかななくてはならないことから、障害を持たない高齢者に比べると更に手厚い支援が必要である。この 2 名の入所者は、ボランティア活動に参加することで、活動に参加している他の入所者を中心に、早い段階で施設内での人間関係を構築することができた。また、入所当初から自然と施設の外に出る機会も増え、在宅時に比べ多様な人々との交流が出来たことによって、うつ症状は表れることなく、帰宅願望についてもあまり口にする事がなくなった。これはこの活動の成果であると考えられる。

地域交流カフェでのボランティア活動は月に 1 回行われたが、回を重ねるごとに施術を行う人数も増えていった。施術中の会話には、施術する側とされる側での相談やアドバイスだけにとどまらず、個人的な話題や身の上話なども交わされるようになり、施設外での交友関係をつくるきっかけとなっていた。活動開始から半年程経過したところで、ボランティア活動参加者間でマッサージの施術に当たり、一人当たりの施術時間を合わせることや、施術内容について統一することで、施術を受ける方に不満が出ないようにしたいと、自然発生的に施設の居室に集まって勉強会が開催されるようになっていた。その中から、活動を行うにあたって、こうしたいという要望や提案がなされるようになり、当初は職員側からの働き掛けによって集まったサークルであったが、徐々に入所者の自主的な活動となっていった。そこでは、施設職員は移動やセッティングのみを支援するだけで、活動の主体は入所者であるという、理想的なボランティア活動という社会参加の形が生まれている。

ボランティア活動に参加した入所者は、施設内での行事や日頃の生活においても活発に楽しんでいる様子が見受けられたが、ボランティア活動参加者が施設内で参加していない入所者対しても積極的に交流する機会が増え、施設全体での人間関係や生活に活力が生まれているように感じられた。特に視覚障害に対して悲観的で、居室に閉じこもり気味だったボランティア活動参加者

が、視覚障害を持つという同じ立場の入所者の手を引くなどの援助をしたり、新規入所者に施設内の設備の説明をしたりと、施設内で積極的に他人との関わりを持ち、奉仕的行動をとられるようになったことは、施設外での活動によって得られた自信と、自己有用感による、更なる生活の充実を目指す心境の変化の表れといえる。

## 2. ボランティア活動を通じての盲養護老人ホーム入所者の主観的な心境の変化

調査 2 のボランティア活動に参加した盲養護老人ホーム入所者の開始前と開始後のインタビュー調査の比較によって、主観的な心境の変化を見ることができた。

「高齢障害者にふさわしい生活拠点と支援の在り方に関する調査・研究事業報告書」<sup>1)</sup>によると、盲養護老人ホーム入所者全員に対して行った基礎調査（対象者 2,954 名、回答数 1,864 名）において、入所以前の生活の状況で、「在宅生活で不安、ストレスを感じていたこと」でもっとも回答が多かったのは「日常生活（36.3%）」次いで「コミュニケーション（10.5%）」「地域住民との関係（7.3%）」となっている。今回の研究の調査対象者も、同居していた家族との死別や、退職、身体能力の低下等の理由によって、「家に閉じこもりがちになってしまった」、「活動に制限があって思うように生活が出来なくなった」という理由で入所に至ったと語っている。また、視覚障害を持つ単身生活者にとっては、近隣の住民からの火の不始末等への不安を受けることも、施設入所を考える大きな理由となっている。これは全体的な調査の結果とも整合するものとなっている。

施設入所後は、施設内の設備の充実や、職員の存在への安心感から、「気を遣わなくていい」状況で、施設内では「自由に」生活でき、「楽になった」という感想が多く聞かれた。反面、施設内で生活が完結しまっていることは否めず、日常で楽しみにしていることを尋ねた時の回答は、ほぼ施設内でのものに限られていたことからそれがうかがえる。

盲養護老人ホームでは、視覚障害への専門的な支援を手厚く行うことで、入所者の日常のストレスを解消し、安全な生活の確保が行えている一方で、その活動範囲を施設内に限定してしまっていると言える。しかし、今回の研究において地域交流の場へ出ることによって、活動開始後のインタビューでは、「外出することが楽しみ」だとの回答が増えている。これは入所者の活動範囲が施設外へと広がり、地域の交流の中でそれまで持っていた不安が解消され、それを楽しむことができる状況になったことを示していると考えられる。

また、施設生活と在宅生活との一番の違いである集団生活についても、「たくさん人がいて寂しくない」と肯定的な感想があるものの、やはり施設生活で苦勞することとして人間関係があげられている。「高齢障害者にふさわしい生活拠点と支援の在り方に関する調査・研究事業報告書」<sup>2)</sup>においても、「盲養護老人ホームは、情報不足からくる猜疑心を縮小し、互惠関係が成立する視覚障害者のピアグループを形成する場所となっている」としている。しかし、視覚障害者同士の理解と、許しあえる寛容で深い互惠関係の形成は、ピアグループの形成の場としての盲養護老人ホームを肯定してはいるものの、それは入所者の活動を施設内に限定している要因にもなっているように思われる。岡村<sup>18)</sup>は、「社会福祉的援助の対象となる個人や家族は、何らかのコミュニティに所属し、集団の一員としての同一性の感情と密接な相互的社会関係に支えられ、更に集団成員の一員として共同的活動への参加意義を持つことによって、計り知れない利益を受ける」とし

ている。コミュニティへの参加は、岡本<sup>19)</sup>が分析した「人間的側面からみたコミュニティの持つ意義」においても、「人間性回復」や「情緒安定の場」「相互の支えあいの場」といった、高齢期の QOL の向上を期待させるものである。活動前には施設という集団生活の不満を、「仕方ない」とし、「表面的につき合う」といった妥協が示されていたが、活動後には同じように「人付き合いが面倒」だと不満の解消にはいたっていないものの、参加者以外の他の入所者に対して、「もっと活動してほしい」「積極的になってほしい」と、妥協ではなく改善するための期待を示していることは、わずかな変化ながら、施設内の限られた人間関係からはなれ、地域での新たなコミュニティへの参加がもたらす視野の拡大が起こったことによるのではないだろうか。本研究において研究者が期待したコミュニティへの参加による変化は、地域での自己有用感の獲得にとどまらず、施設内においても視覚障害者としてのピアグループが重層的なミニコミュニティとして発展していくという側面ももたらした。「高齢障害者にふさわしい生活拠点と支援の在り方に関する調査・研究事業報告書」<sup>2)</sup>では、コミュニティへの参加は「複数に属していることが重要で、ひとつだと貢献する者と依存する者、支配する者と従属する者など立場が固定してしまい、心のバランスを保つことや生活の充足感を得ることができなくなってしまう」という懸念をあげているが、新たなコミュニティの出現は、生活の充足感につながるものと期待される。また、活動前には職員との関係において、一方的に支援を受ける側としての安心感が前面に表れていたが、活動後には「職員が忙しい」と職務に関する理解を示しながらも、「ゆっくり話すことができない」ことに不満を持つなど、職員とのより深い人間関係の構築を期待する発言が見えて、限られたコミュニティ内で懸念される「立場の固定」が崩れていると言える。自主性の発現により、生活の場としての施設を快適に過ごすための欲求を示されたものだと思う。

ボランティア活動に関しては、当初は職員からの参加の呼びかけに対して、あまり乗り気でなく初めてすることに関しての不安を持たれている様子が伺える。これはマッサージという慣れた活動ではあるものの、施設の外に出るといふことと、知らない人に対して施術を行うという戸惑いであると思われる。積極的に参加を決められた入所者も期待とともに不安もあるようであった。開始後のインタビューにおいては、これらの不安は払拭されていて、活動によってもたらされる自身の健康面の改善や充実感を期待する気持ちが大きくなっていることが分かる。活動に関して「喜ばれるので嬉しい」と語り、「お礼を言ってくれる」ことに喜びを感じている。これは自己有用感の獲得に至ったことを表していて、ボランティア活動に期待する一番の効果であると言える。他のボランティア活動への意欲については、開始以前は同じ「マッサージしかできない」という意見の、「思いつかない」「わからない」といった、イメージできない状況での回答であるが、活動を経験してからの、「マッサージがいい」という意見は、やはり自信の持てる専門性を使って活動することが自己有用感の獲得に有効であると感じられているからだと考察できる。得意分野での専門性の発揮が自信となり、より高い自己有用感の獲得へと至ったものであると言える。更に開始前には見られなかった、「何か他の活動についてもやってみたい」という意欲の発露もあったことは、より高次の自己実現欲求への期待を感じさせるものである。

今後の生活への希望に関しては、開始以前と開始後に目立った変化は見られなかった。これは研究期間の長さにもよるものだと考えられ、この活動を今後も継続していくことによって、参加者にさまざまな可能性への希望がもたらされることを期待するものである。

前述の盲養護老人ホーム入所者の主観的变化について、「生きがい」と密接な関連があるとされているマズローの欲求5段階説<sup>3)</sup>に沿ってしてみると、第1段階の「生理的欲求」第2段階の「安全欲求」は、盲養護老人ホームに入所することによって満たされるものと考えられる。そして第3段階の「社会的欲求」、人と交流し、集団への帰属意識を求めることに関しては、施設内での人間関係の改善によってもたらされた施設内での新たなコミュニティの形成と地域という新たなコミュニティへの参加によって、重層的なコミュニティへの帰属がもたらされたことによって満たされたと思われる。そしてこのボランティア活動によって、自身の専門性を発揮し、それによって人からの承認を得られたことによって、第4段階の「尊厳欲求」、人に認められ、ステータスを確保しようとする段階にまで到達したと考えられる。第5段階「自己実現欲求」、夢や希望を実現し、精神的な成長を目指すという段階は、今後の生活への希望や将来についてはあまり考えに至らないという結果だったことから、研究期間内ではそこまで至らなかったと考えるべきであるか、ボランティア活動自体の限界であるのかは、更に今後も研究を進めていく必要があると思われる。

### 3. ボランティア活動によってもたらされた周囲の変化

調査3における盲養護老人ホーム職員のインタビューから、ボランティア活動によってもたらされた周囲の変化について考察し

ボランティア活動開始以前、施設での集団生活になじめない様子を見せていた入所者が、ボランティア活動に参加しその中で施設の外での地域交流により、刺激を受け、それを楽しむことによって、施設内の人間関係にも変化を見せている。それまでは、どちらかという居室に閉じこもりがちで、上手く人付き合いができなかったが、居室から出て、施設の共有スペースで他の入所者と過ごす時間が増えたことや、他の入所者に対して気遣いを見せ、援助する様子を目にする機会が増えたことである。木原<sup>19)</sup>は「要介護者でも人に尽くす行為をした当人に顕著な治療効果があらわれる」といい、そのことをボランティア・セラピーと称している。この効果は、活動開始前に入所者に表れていた認知症の症状の消失という形でも表れている。

研究フィールドであるM盲養護老人ホームでは、入所者の高齢化による要介護度の重度化に伴い、自立支援のための取り組みを進め、おむつゼロ、常食化など、身体的自立性の回復にも取り組んでいる。盲養護老人ホーム職員は、その中で身体的には自立しているものの、居室に閉じこもりがちで、上手く人付き合いができない様子や、入所者間の人間関係を上手く構築できない入所者の存在に、支援の必要性を感じていたが、この活動の成果によって、その援助の方向性を見極めることができたと考えられる。

盲養護老人ホーム職員は、ボランティア活動参加者が、活動によりその心身の活性化と生活の活性化を見せたことに加え、参加者の変化が施設の中で活動に参加していない入所者にも影響を与え、施設全体に活性化をもたらせたことに驚きと喜びを感じている。それは施設内での援助に限界を感じていた職員にとって、新たな希望となっている。

職員はこのボランティア活動に参加している入所者の日々の変化を間近で感じ、その様子を語っているが、その中で顕著に表れたものは、実は職員自身の入所者に対する見方の変化であった。一方的に援助を行う対象であった入所者が、その経験を生かし施設の中では見られなかったプロ

フェッショナルな顔を活動の場で見せたことに、改めて、その能力を評価し尊敬に至っている。それは活動の場だけにとどまらず、施設での日常においても垣間見られる。この活動開始以後、よく職務時間外の職員が入所者の居室を訪れるようになった。ボランティアの一環として職員に対しても施術する様子が見られた。職員はその間はマッサージを受ける、いわばボランティアの対象者となり、普段の援助をする側とされる側の立場の逆転が起こっている。ここで、盲養護老人ホーム入所者は、施設入所によって失った地域や家庭での役割を、再獲得し自己有用感の獲得に至ることが出来たと言える。職員が入所者に対し専門家としての意見を求める、また施術を受けることは、高齢者の人生経験への尊敬と理解が生まれ、施設の入所者と職員との関係性においても、より深い信頼関係の構築に役立つものだと考えられる。

また、盲養護老人ホーム職員が、入所者の地域交流による変化に刺激され、自身の職務への期待と、更なる入所者の生きがいの獲得の為に意欲を見せていることも、本研究の重要な成果であると言える。入所者のより充実した生活のために「もっと活動の幅を広げてほしい」と考え、そのために施設環境を整えていくことを目標とし、「色々な活動の企画実現の為に勉強したい」と自身のスキルを向上させることに言及している。

これらの変化は、ボランティア活動に参加した入所者によってもたらされた、周囲への影響であり、単に参加者のみの QOL の向上だけにはとどまらないものとなっていることが分かる。

#### 4. 高齢視覚障害にふさわしい生活拠点としての盲養護老人ホーム

視覚障害は五感（聴覚、視覚、嗅覚、触覚、味覚）から得られる「情報」のうち、9割程度を失う障害である。高齢視覚障害者にふさわしい生活拠点と支援のあり方に関する調査・研究事業報告書<sup>2)</sup>の中には「一般に情報不足が「猜疑心」を生むように、日常的に情報不足となり、とりわけ人間関係において、「猜疑心」が障壁となることも少なくなく、孤立してしまうことや大きな喪失感を味わうことにつながっている。」という記述がある。「猜疑心」とは相手の行為などを疑ったり妬んだりする気持ちのことで、しばし視覚障害者を評する場合に使用されるが、それは偏見であるように思う。猜疑とは言い換えれば、人間が環境に最もよく適応するために用心深く入念に、という自己防衛の心理であり、この自己防衛心理が適度に働きかつその結果がおおむね適正な判断に終わったときは、猜疑とはいわず、むしろ洞察作用と言える。このように理解不足による偏見は、視覚障害者の社会適応能力を著しく低めている。しばしば視覚障害高齢者が一般の施設を利用する際に、十分な情報を与えられず、状況の判断ができないことから孤立してしまうことがある。情報不足からくる不安と恐怖心は、自ずから行動にも制限をもたらす、また援助する側から視覚障害を理由に行動の制限をされることもあり得る。しかしこのような視覚障害者の特性とされている猜疑心の強さを示していた盲養護老人ホーム入所者も、ボランティア活動を行うことで、人間関係を上手く構築していくことができるようになっていく。視覚障害がもたらす不安は十分な援助によって軽減することが可能であるが、やはり「自己有用感」による「生きがい」の獲得が生活自体の活性化につながり、孤立の解消に至ったのだと考えられる。

盲養護老人ホーム等の特定の障害を持つ高齢者に対する施設は、ともすれば、ノーマライゼーションの観点からは反するように思えるかもしれない。しかし鈴木<sup>20)</sup>は「ノーマライゼーションの考え方は、すぐれた専門的な施設や社会福祉システムを、否定したり軽視したりするものでは

ない。反対に、もっと実質を備えた専門的な施設を、町の真中につくろうではないかという考え方なのだ」とし、「山のなかの大きなコロニーや町はずれの淋しい場所の立派な老人ホーム」よりは、「町の真中に、小さくてもいいから、もっと多くの、もっとすぐれた施設をつくっていこうという提案」だとしている。それらの施設は、「たんに、ハンディキャップを負った人々の療育や社会復帰のための支援を行うだけでなく、町の人々が積極的にこの分野の仕事に参加し、住民のみんながこの問題に正しい理解を持つことができるようにするための「センター」の役割を演じなければならない。」のである。しかし、更にその施設の中で生活する「ハンディキャップを負った人々」が、その地域の中で重要な役割を持つことができるとすれば、それは真に目指すべきノーマライゼーションを促進する地域包括ケアシステムの姿となるのではないだろうか。視覚障害というハンディキャップに対して、専門的な支援を提供することで、入所者の安心と安全を確保する一方で、その活動を地域に広げていくこと、それは入所者が、地域のコミュニティの一員として活躍でき、地域にとってもコミュニティの担い手として、新たな住民を迎え入れることになるからである。

ボランティアには自主性という意味が含まれる、「自主性」は施設に入所した高齢視覚障害者にとって、援助を受ける中で決められた日課や用意されたレクリエーションをこなすだけの生活では困難なものであったと思われる。ノーマライゼーションの観点から言えば、入所者にこの自主性を発揮できる機会を作ることも、施設の役目であると言える。今研究においてこの自主性は、ボランティア活動参加者の中で自然発生的に生まれた、マッサージの技術の向上や、施術対象者への均等な時間配分のための、参加者同士での調整を行う勉強会の開催に見ることができた。参加開始は積極的でなかった盲養護老人ホーム入所者も、活動を続けるうちに、その活動をよりよくしていこうとする意欲と、その為の働きかけを自ら行うに至っている。

鈴木<sup>20)</sup>はまた、「障害のために、または高齢化の為に、社会生活上のハンディキャップを負った人々が、とかく迫害され、冷遇され、あるいは放置される傾向が強かった時代に、これらの人々を特定の施設に収容し、保護するという方法は、この問題に対する最初の接近の仕方としては、正当なものであったし、やむをえないものであったといえる」としながら、「しかし、社会福祉の活動を大きく発展させてきた国々では、いま、こうした方法のもつ限界や問題点に、気付くようになってきているのである」と述べている。施設という限られた環境のなかでは、障害を持った高齢者の「生きがい」の獲得は難しく、施設の中だけで完結する生活を送ることは、QOL向上の観点からも限界がある。本研究では、施設入所者がいかに地域へ出ていくか、そしていかにコミュニティの一員となっていくべきかの一つの指針を示せたと感じている。

また、本研究で盲養護老人ホーム入所者が行った、ボランティア活動としてのマッサージの施術に関しては、視覚障害を持つ入所者にとって、特別な意味を持つのである。長谷部<sup>21)</sup>は視覚障害者の主要な職業がはり・きゅう・あんま業であることについて「だれでもが視力を失えば、いやでもおうでもはり・きゅう・あんま業でなければ生きていけないような社会構造にしている、国の盲人政策そのものに問題があるのではなからうか」とし、「それよりも私がかまんできかないのは、そのはり・きゅう・あんま業さえが「あんまさん」の呼び名にしみじくもにじみ出ているように、社会から不当にいやしめられ、盲人自身も卑屈なこだわりから抜け切れないでいるという、現実的な姿があることである」と指摘している。この長谷部の言は時代的なものもあり、今では

あん摩業は視覚障害者にとどまらず、一般的な専門職として認知されていて、不当な蔑視の対象とはいえない。しかし盲養護老人ホーム入所者は、社会的自立の手段として限られた選択肢のうち、この職業を長年続けてきたということも事実である。それでもその長年の経験と手腕は、ボランティア活動においても、施術対象者からの感謝と尊敬を受けるものであり、専門家としての自信と誇りを再び持つことができるのだと言える。それは「自己有用感」獲得への有効な手段となるのである。視覚障害を持つことで、ボランティアと言ってもその活動の幅は狭くなってしまいが、だからこそ、その人にしかできないという活動は、障害の有無を超越して、役割意識を強くし、より「生きがい」となるものであると考える。

高齢期のボランティア活動による有用性は本研究でも実証された。更にボランティア活動に積極的でなかった高齢者に、活動の場と自らの経験を生かすことのできる活動を示すことで、閉じこもりがちな生活を活性化し、「生きがい」の獲得に至ったと言える。

#### IV 本研究の限界と課題

本研究は盲養護老人ホームに入所するマッサージ師の資格を持つ方のボランティア活動を対象としたことから、対象者が少数であり、汎用的でないという点で限界がある。また今後活動を継続的に追うことによって本研究期間中では現れなかった変化の可能性も考えられることから、更に対象者や活動の種類、研究の期間を増やし、検討をかさねていく必要がある。

#### V 結語

盲養護老人ホーム入所者が、ボランティア活動に参加することによって、自己有用感を得て「生きがい」を見出し、施設での生活についても前向きな心境に変化していくことが明らかとなった。これは施設入所という支援を一方向的に受ける環境においても、何らかの役割を持つことが「生きがい」の獲得となり、ボランティア活動が新たな地域コミュニティへの参加に有効であることを示したものであると言える。

また施設入所者のボランティア活動による地域の交流は、参加者の生活への質の向上の意欲とともに、参加されていない入所者や、職員の意欲の向上にも影響し、施設全体の活性化につながることが明らかになった。

施設入所がやむを得ない高齢者に対して、在宅復帰を視野に入れた自立支援介護による身体的な自立の再獲得とならんで、地域との繋がりを再構築すること、更にその中での自己有用感による「生きがい」を獲得する為に、生活歴に則したボランティア活動を支援していくことが、地域包括ケアシステムにおける施設の重要な役割となると考える。施設への入所が、高齢者の社会参加の機会を閉ざさないこと、積極的に地域との交流の場を作っていくことが必要になるのではないかと。



## 謝辞

本研究にご協力いただいた M 盲養護老人ホームの入所者様、職員の方々、そして地域でこの活動を受け入れていただいた I 地区の地域ケア連絡会の皆様、R 公民館、J 公民館の関係者の皆様に深く感謝いたします。

また、研究に関するご指導をいただきました国際医療福祉大学大学院の竹内孝仁先生、講師の小平めぐみ先生、准教授の井上善行先生に心より感謝いたします。

最後に、自身も視覚障害を持ちながら高齢視覚障害者の為に盲養護老人ホームを設立、その運営に生涯を捧げた両親に、深い尊敬の念と感謝を伝えたいと思います。

## 文献一覧

- 1)厚生労働省.身体障害児・者実態調査.平成 18 年度版
- 2)特定非営利活動法人全国老人福祉施設連絡協議会.高齢視覚障害者にふさわしい生活拠点と支援の在り方に関する調査・研究事業報告書.2016
- 3)A.H.Maslow(小口忠彦訳).人間性の心理学:モチベーションとパーソナリティ.改定新版.東京;産能大出版部.1987
- 4)妹尾香織,高木修.高齢者の援助行動経験と心理・社会的幸福・安寧感との関連.心理学研究,75(5) 2004;428-434
- 5)望月七重,李政元,包敏.高齢者のボランティア活動(参加・継続意向)に影響を与える要因-高齢者大学の社会還元活動実態調査から-.関西大学社会学部紀要,91 2002;181-193
- 6)Greenfield E A, Marks N F.Formal volunteering as a prospective factor for older adults' psychological well-being.Journal of Gerontology,59 2004;258-264
- 7)中原純.高齢者のボランティア活動に関する研究の動向:シニアボランティアの現状と課題
- 8)清水祐子,佐藤みつ子,森千鶴ら.在宅高齢者と施設入所(入院)高齢者の QOL に関する研究.山梨大紀要,16.1999;23-27
- 9)市川光代,岩下清子.軽費老人ホーム居住者が行う認知症デイ利用者との交流・支援活動についての一考察.国際医療福祉大学大学誌第,18(2) 2013;9-21
- 10)大湾明美,佐久川政吉,大川嶺子ら.離島における施設入所高齢者の生きがいづくりに関する研究-「ふるさと訪問」事業化への取り組みのプロセスと事業評価・課題-.沖縄県立看護大学紀要,4 2003;37-47
- 11)酒井久江,新阜義弘.これからの高齢視覚障害者支援のあり方.地域リハビリテーション,10(11).2015;803-806
- 12)佐藤三四二.施設利用者の生活リハの現状.地域リハビリテーション 10(11).2015;795-799
- 13)柳澤美衣子,国松志保,加藤聡ら.視覚障害者における視覚障害等級と生活の質(QOL)評価.臨床眼科,62(3) 2008;259-263
- 14)高田明子,大島千帆,下垣光.地域における“視覚障害のある高齢者”への支援と課題.地域リハビリテーション,10(11).2015;778-782
- 15)竹内孝仁,小平めぐみ,井上善行ら.介護の生理学.東京;秀和システム,2013
- 16)上原紀美子.高齢者福祉政策における生きがい論.久留米大学文学部紀要社会福祉学科編,5 2005;13-25
- 17)斎藤静.高齢期における生きがいと適応に関する研究-ネットワークの視点から-.現代社会文化研究,41 2008;63-75
- 18)岡村重夫.地域福祉論.第 2 版.東京;光生館,1976
- 19)木原孝久.ボランティア・セラピー-要介護者の力が活きる福祉のカタチ-.東京;中央法規出版,2005

- 20)鈴木正行.視覚障害者とノーマライゼーションー視覚障害者の障害受容と社会環境の変遷。「盲人たちの自叙伝」を視座にしてー.東京;学文社.2008.26,28
- 21)長谷部薫.この人びとに青い鳥を.山梨;山梨日日新聞厚生文化事業団,1971.129-130

## 資料 1

### インタビューガイド

「盲養護老人ホーム入所者のボランティア活動に関する研究—地域の交流による変化—」にご協力頂き、ありがとうございます。このインタビューは今後の施設運営に役立てるための研究に使用するために行うものです。

質問をいくつかご用意しておりますが、できるだけ自由にご自身の言葉でお話ししていただければと思っています。インタビューは録音し後に書き起こしますが内容を扱うのは研究者のみです。研究の結果は、論文として発表させていただきますが、あなたのお名前やあなた個人を識別できるような情報を公表することはありません。

それでは録音を開始させていただきます。

#### 第一回目（ボランティア活動開始前）

##### 1. 現在の生活の印象

問い. 今の生活についてお伺いいたします。

- ・施設での生活をどう思われていますか？
- ・施設に入所されて良かったことはありますか？
- ・施設に入所されて悪かったことはありますか？
- ・楽しみはなんですか？

##### 2. ボランティア活動について

問い. ボランティア活動についてお伺いさせていただきます。

- ・ボランティア活動をどう思われますか？
- ・期待する事はありますか？
- ・不安なことはありますか？
- ・やってみたいボランティア活動はありますか？

##### 3. 施設での対人関係

問い. ここ(施設)にはどんな方がいますか？

- ・好きな方はいますか？
- ・苦手な方はいますか？

#### 4. 今後の希望と不安

問い. これから望まれることはありますか？

- ・ したいことはありますか？
- ・ 欲しいものはありますか？
- ・ どんな暮らしを望まれますか？
- ・ 不安はありますか？

### 第二回目（ボランティア活動開始後）

#### 1. 現在の生活の印象

問い. 今の生活についてお伺いいたします

- ・ 施設での生活をどう思われますか？
- ・ 施設に入所されて良かったことはありますか？
- ・ 施設に入所されて悪かったことはありますか？
- ・ 楽しみはなんですか？

#### 2. ボランティア活動について

問い. ボランティア活動についてお伺いさせていただきます

- ・ ボランティア活動をどう思いますか？
- ・ やってみて良かったことはありますか？
- ・ やってみて不満なことはありますか？
- ・ 他にやってみたいボランティア活動はありますか？

#### 3. 地域での対人関係

問い. ボランティア活動で交流する方々についてお伺いさせていただきます

- ・ お好きな方はいますか？
- ・ 苦手な方はいますか？

#### 4. 今後の希望と不安

問い. これから望まれることはありますか？

- ・ したいことはありますか？
- ・ 欲しいものはありますか？
- ・ どんな暮らしを望まれますか？
- ・ 不安はありますか？

以上でインタビューは終わりです。後ほど、インタビューの録音を書き起こして、他の方のインタビューと合わせて分析いたします。録音、書き起こした文書は破棄いたします。ご協力ありがとうございました。

## 資料2

### インタビューガイド

「盲養護老人ホーム入所者のボランティア活動に関する研究—地域の交流による変化—」にご協力頂き、ありがとうございます。このインタビューは今後の施設運営に役立てるための研究に使用するために行うものです。

質問をいくつかご用意しておりますが、できるだけ自由にご自身の言葉でお話ししていただければと思っています。インタビューは録音し後に書き起こしますが内容を扱うのは研究者のみです。研究の結果は、論文として発表させていただきますが、あなたのお名前やあなた個人を識別できるような情報を公表することはありません。

それでは録音を開始させていただきます。

#### 1. ボランティア活動に参加された入所者の以前の様子とその後の変化

問い. ボランティア活動に参加された入所者の変化についてお伺いします。

- ・ ボランティア活動をする前はどのような様子でしたか？
- ・ 活動に参加された時の様子はどのような様子でしたか？
- ・ 活動されるようになって変わったことはありますか？

#### 2. 施設での自立支援介護の取り組みについて

問い. 自立支援介護についてお伺いいたします。

- ・ 自立支援介護に取り組んでどう思われていますか？
- ・ 自立支援介護の成果はありましたか？

#### 3. 今後への期待

問い. 今後期待される事についてお伺いいたします。

以上でインタビューは終わりです。後ほど、インタビューの録音を書き起こして、他の方のインタビューと合わせて分析いたします。録音、書き起こした文書は破棄いたします。ご協力ありがとうございました。

資料3

盲養護老人ホーム入所者の語りから中心的意味を抽出するためのワークシート  
(ボランティア活動開始前)

語り	中心的意味
私たちがたよるあれがないもんですけんね、子供も持たんにゃ兄弟もないごとなつてからですね、やっぱ私なおかげでたすかっております。	身寄りがない 入所して助かっている
今でもやっぱあの、甥の嫁さんたちにゃ感謝はしとうばってんですね、やっぱ、ここが一番気楽でよか	身内に感謝はしているが施設は気楽でいい
そりゃですね、人間じゃけん気も使わないかんし、わがままばかりは言われんし、また、あれ、ねえ、おたがいの生活じゃけん。まあそれだきや考えております。	気を遣っている 集団生活なので仕方がない
色んな人のねえ、大勢の中ですから、陰で話したことなんかをね、ちょっと探るごたあことやらあるごたあけん、それが嫌ですかねえ	人間関係で嫌なことがある
今は時々ですばってんね、あんまりいてもまた良しあしやろうと思うて。まあ、遠慮がちにしますばってんね。	友達付き合いにも気を遣う
やっぱ大人数のことやけん難しいこともあろう。	集団生活なのであきらめている
私がもうこげつまらん人間やけんですね、もう〇〇さんとなごう付きおうてやらっしやったけん、それが一番の幸せですねえ	長く付き合える友人がいることが幸せ
手がしびれるけん、行ってもかえって迷惑にならんかいなつて	迷惑を掛けないか不安
私は外に出ることが(乗り気でない)、他の方は70代で体格のよか人ばかりやる	自分の年齢が心配



このごろ出不精になったとですよ。	参加に乗り気ではない
それが職員さんが急に言ってこられましたからね、なんて言いようもありませんでした。	急に言われて引き受けた
これでいいですよ、ブラウスで、白衣もあるかないかは覚えてないですもん。	白衣で施術しなくていいか
それがね、初めてでしょう、それであの、しきるかいなって思うわけですよ。大丈夫かいな、間違わないかなって。もう何十年ってしてませんからね。	初めてなので不安 ブランクが心配
そのしながらね、質問なんかされるのがドキドキ。普通の話するならいいけど、そのしながらね、治療しながら言われるとさっとなんか出てきませんもん。	施術しながら上手く話せるか不安
ああ、本当、親戚にも言うの、良かったあって、安心して生活ができるしね、なんも嫌なことないしね、ほんとよかったって言うてきたんですよ	施設での生活は安心でよかった
まあ、お金もいらないし、美味しいものもいただけるし、本当何の心配もいらないから、(不自由なこと)無い、無いの、ほんと無い。	なんの心配もいらない
もう今まで一人で寂しかったでしょ、不安で不安でねえ。寂しかったけど、ここに来たらほらいっぱいいらっしゃるから、寂しいってことが無いじゃないですか。	入所前は寂しくて不安だった 周りに人がたくさんいるので寂しくない
仕事辞めて4ヶ月間自分のうちにいたんだけど、不安と、一人でじっと部屋にいるのね、3LDKだったけどね。寂しくて、不安と。	入所前は家に籠っていた 寂しくて不安だった
もう楽しみって今んとこ、親戚が来てくれるのが楽しみです。何か持ってきてくれるし、連れて出てくれるし。	親戚の訪れが楽しみ
(職員は)みんないい。誰にでも親戚の人にも私言うの、優しいしね、安心してなんでも話せるしね、	職員が優しい 職員には安心してなんでも話せる

もう心配せんでいいよ、安心しとって、死ぬまであすこにおれるからって言ってきました	死ぬまでいれる場所
別に退屈してるからいいですよ。誰でもいいですよ、退屈で退屈で、じーっとテレビだけでしょ、してあげるのは私全然、50年働いたんだから。もう手が慣れてるし、もうどうもないですよ、してあげていいですよ。	普段は退屈している  慣れているので快く承諾する
期待って別にないわあ、喜んでいただけたらいいわ、揉んでもらってきもちよかったあ言うて。	喜んでもらえたら嬉しい
私人と接すること全然不安じゃない、人と接する仕事だったから。	人と接することに不安はない
もう仕事してないのに、腕もみてないのに、声だけで「明日も来てね、明日も泊まるのよ」って言われるほど、みんなから好かれてた。いっぱいお客さん持ってました。	昔はいっぱい患者さんを持っていた
したいことって、もう贅沢言わないもん。そげななんばするね。いや、もうよか、いい、出れば金だから。 たまにね、スーパーに、たまに行きたいよね、お菓子買ったり、甘党だからお菓子をねえ。	今の暮らしに贅沢は言わない  スーパーに買い物に行きたい
何もいらんもんここにおったら、食べて寝たらそれでいいじゃないの、どういう暮らしって、もう贅沢言いません。これで上等よ。	今の暮らしに満足している
元気が一番ですね、もう元気で行きましよう。元気が一番ですね、病気しないようにします。	元気でいることが一番の望み
いいですよ。まあここでゆっくりと何されて、みんながようしてくれるから	みんながよくしてくれる
楽しみっちゅうとは、ただこの外(遊歩道)を回って、朝早よう回りよる。	遊歩道を歩くのが楽しみ

<p>僕はもう、てれてれして遊んどくなら、行かれるなら毎日でもいい。</p> <p>やっぱ自分の体のためにも一番いいですたいね。</p> <p>それと色々な話もできるからですね。</p>	<p>毎日でも参加したい</p> <p>自分の健康の為になる</p> <p>色々な話ができる</p>
<p>うん、ボランティアも自分でできる範囲だったらですね。その嫌ってことは無い。</p>	<p>自分のできる範囲のことだと嫌ではない</p>
<p>僕はそげなこと全然考えたことがない。</p>	<p>将来のことは考えない</p>
<p>言われればするっちゆうことだけで、自分がこれがしたいってことはあんまない</p>	<p>自分からしようとすることはない</p>
<p>こっちに來たら任せとっていいから、樂になりましたねものすごく、精神的にも。</p>	<p>入所して精神的にも樂になった</p>
<p>私は昔から不眠症があつて、色々色々そして一人ため込むようなことがありまして、家族との関係もあつたしですね。それが一緒に解消して、ここに来たらな一人も考えんでいいからね。それでもものすごい樂になりましたね</p>	<p>入所前は色々悩んでいた</p> <p>入所したら樂になった</p>
<p>姉がおつたんですけど、最期、認知症にかかってからですね、色々色々変わってから、あれしよつたもんですから、姉も死んでしまったものですから、それでもう思い切つてここに入らんかって言われてから、決断して入つて良かつたです。</p>	<p>いっしょに暮らしていた姉が亡くなつた</p> <p>思い切つて入所して良かつた</p>
<p>(不満は)別にないですねえ、言えば何でもしてもらえますからね。</p> <p>楽しみはそうですね、まあ、読書三昧されるってことですね。</p>	<p>何も不自由はない</p> <p>読書が楽しみ</p>
<p>役に立つならいいなつて思つて。話があつた時応募したんですけど。はい少しでも(役に立つので)。</p>	<p>役に立てたらと引き受けた</p>
<p>ことマッサージによることだったら不安は感じませんが、まあ氣に入ってもらえるかどうかは知らんけど、やることにとつたら不安はない</p>	<p>マッサージをすることに不安はない</p> <p>氣に入ってもらえるかは分からない</p>
<p>他にですか、ボランティア活動ですか、いや他には。</p>	<p>他にできることは思いつかない</p>

<p>ちょっとあの趣味のあれやったら、山登りやらしてみたいなと思って、今階段やら上りよる。練習してますけど。</p>	<p>山登りをしたい 山登りのための練習をしている</p>
<p>分からんからですね、お話せんからですね、僕の方が悪いかもしれんけど。</p>	<p>他の入所者と話さない</p>
<p>別にしたいことはない、そうねえ、あんまり今んところないですね。</p>	<p>したいことはない</p>
<p>心の中に考えて、自分でできるおもしろいことないかなあって色々考えよる。お金がないですけんね、考えていきたいですけど。</p>	<p>出来ることを考えている お金がない</p>
<p>今の生活、そうね、まあ、簡単に言や、まあ楽しいこともあれば色々、楽しいこともあれば辛いこともある。</p>	<p>楽しいこともあれば辛いこともある</p>
<p>そうね、よかったことっていうのはえっとまあ、花見とかね、ま、旅行、そういった行事がいいな、いいと思います。</p>	<p>行事が楽しみ</p>
<p>(ボランティア活動は)初めてやけんね、まったくあれがその(想像が)つかんもんね。半分は不安なごたあ。</p>	<p>初めてで不安</p>
<p>あんまり家にじーっとしとつても仕方ないから、まあ、ちょっと気休めっちゃおかしいけど行ってみようと思うて。</p>	<p>部屋に籠っていても仕方ないので行ってみよう</p>
<p>そらどうなるか思うて不安やろうね。何回か行つとればね、そうこたえんけど</p>	<p>どうなるかわからないから不安</p>
<p>(他のボランティア活動)さあ、今んところないね、マッサージはしたことあるけど。</p>	<p>マッサージ以外はできるかわからない</p>
<p>やっぱね、どう言っいいかね、人間関係だから色々あるはね、この人ならあれだと。中にはね、ああ、こういう人やっただいねって。なんか話しにくい人と話しやすい人と。</p>	<p>話しやすい人と話しにくい人がいる</p>

<p>やっぱ(職員とも)色々あるね。まあ、色々ね、いい人はとても、まあ、誰でもいいけど、やっぱ色々あるたいね、職員さんもね。</p>	<p>職員にもいい人とそうでない人がいる</p>
<p>欲しいものはたくさんあるけど、たくさんちゅうのは、そうね、そうたいあの、こういったたまにはね、買い物に連れて行ってもらって、コーヒーとかね、特に食べ物をね。</p>	<p>欲しいものはたくさんある 買い物に行って嗜好品を買いたい</p>
<p>そうね、ま、元気はあるばってんもうちょっと体を鍛えないかんね。そして旅行に行くとか。</p>	<p>旅行に行く為に体を鍛えたい</p>
<p>心配はあろうけどね、まあ、ちょっとあの前、職業病ちゅうて腰を痛めたのね、ほいであの、痛めたのはよかったけど、あのその、なんちゅうと軟骨をね、なんていうかね、なんかすり減って、それと変形ですたいね。これがちょっとあの、不安になるけど、時々痛くなったり。</p>	<p>痛めた腰が心配 時々痛んだりすることが不安</p>
<p>私はほら、今誰もいないからね、ここに世話になって、楽しいですよ。</p>	<p>身寄りがいない 施設に入って楽しい</p>
<p>だけん園生とは楽しくいきたいなあと考えて、喧嘩することはね、嫌なんですよね。</p>	<p>他の入所者と楽しく暮らしたい</p>
<p>施設はやっぱ、職員の方も園生も一緒にね、やっぱ仲良く暮らしたいです。それが一番です、私。</p>	<p>他の入所者と職員と仲良くしたい</p>
<p>最初は目が見えるんやろかとかね、最初は私が色々覚えて、布団干したりさっど行くでしょ、見えんでそこまできんよって言われたことが何べんもあります、園生の方から</p>	<p>他の入所者から目が見えてるのではと言われた</p>
<p>何年かするうちにわかってきて、それが最初は陰口を聞いたりね、それから皆さんで色々言われたり、聞きました。だけどね、それを気にしてたら施設では暮らせません。</p>	<p>陰口を言われた 気にしていたら施設では暮らせない</p>

<p>やけんもう、最初は出ようかなって何度も考えたことがあります。</p> <p>今はね、全然、まったくありません。楽しいです今は。</p>	<p>何度も退所を考えた</p> <p>今は楽しい</p>
<p>その、家は自分で自由自在でしょ、仕事もしてるし。主人もいたし、ま、主人は亡くなりましたけどね、ここに入る5年前に。</p> <p>それでも患者さんがうちは良かったんですよ、とても恵まれていましてね、それは幸せでしたけど。</p>	<p>家では不自由なく暮らしていた</p> <p>周りの人に恵まれて幸せだった</p>
<p>市役所をお願いしたんですよ、近くに眼医者の方がいらっしゃいましたからね、その方に相談に行って、そしたら〇〇さんの場合は目の見えないし、家も大き過ぎるし、ご主人も亡くなったことやし入れますよって言われて。施設は自分で探しました。</p>	<p>入所の条件がそろっていた</p> <p>自分で施設を探した</p>
<p>だから、それを探して入る時は心配でした、最初は。不安でしたけど、もういつときしたら慣れました。</p>	<p>入所当初は不安だった</p> <p>時間が経てば慣れた</p>
<p>友達はね、やっぱ〇〇市の中心におってもらった方が、自分たちも行くから、中心(の施設)に入ってもらいたいわって、それが願いだったの。</p>	<p>市内の施設がよかった</p>
<p>楽しみは自分で動くことですね。色々その自分の生活の、洗濯したり布団干したり、(生活自体が)楽しいです。</p>	<p>体を動かすことが楽しみ</p>
<p>私は人にいらん世話かもしれんけど、世話をすることが大好き</p>	<p>人の世話をすることが好き</p>
<p>そうですね、こっちは仲良くしようと思っても、耳に入ってくるのがね、例えば自分に言う時と、陰とは全然違うことがあるんですよ、私はそれはきらいやから、お付き合いはほどほどでいいなって思うことはあります。</p>	<p>仲良くしたくてもできない人がいる</p> <p>ほどほどに付き合おうと思う</p>

顔も違うようにね、溶け込んでいこうと思う時でも溶け込んでいけない時もありますよ。だけんそれはね、表面的に私は付き合っていますよ。	表面的に付き合う
いやあ、私はこういうこと(ボランティア活動)はどんどんして欲しいですね。	ボランティア活動はどんどんしてほしい
皆さんが行って、もう行かんとかいう気分にならんようにしたいです。	皆に嫌にならないでほしい
例えばね、卓球がしたいね。スポーツとかね、山登りとか。(以前は)してましたよ。したいですね。	以前していたスポーツがしたい
ふさぎ込まないで、もう、できないからとか自分は出来るからいいじゃないねとか、すぐ言われる人がいる。そういう心は無くしてほしいけど、それが今更ね。言っても無理です。	できないからとあきらめることをやめてほしい 言っても変わらない
おおいに私たちは参加してほしいけどね、みんながそうしてくれないと、私たちばかり頑張っても、今度は悪く言われますから。	自分だけではなくみんなに参加してほしい
心が狭くなるとやっばつい人のこと妬んだり、それが大いにありますからね、	妬んだりする人がいる
(職員で)えこひいきをされる人がありますね、これはやめてほしいですね。されてもらってる人はいいかもしれないですけど、たくさん園生がいるでしょ、愚痴を言ってますからね、愚痴を出さないように。	職員のえこひいきが嫌だ 入所者が愚痴を言わないような施設にしてほしい

資料4

盲養護老人ホーム入所者の語りから中心的意味を抽出するためのワークシート  
(ボランティア活動開始以後)

語り	中心的意味
今ねえ、やっぱ外に行ったりすることじゃないかと思いますが、他の人たちはどんなか……。いいですよ外に出るって	外出が楽しみ
それがもう、あの、腰がなかなか、痛くてですね。	腰が痛い
針もしてもらいに行きたいけど、なかなかね、車賃つこうてまでと考えるわけですよ。	針に行きたいがお金がかかる
腰が痛いもんですから、苦になりますよ。迷惑ってことかないけれど、痛さが無かったらねと思いますとですたい。	腰が痛いのが苦になる 腰が痛くなかったらもっと参加したい
よかったことは、みんなで一緒に行って、食事に行ったことがよかったねと思って。	参加者で食事会に行った 食事会が楽しかった
しながら話をしたりはしますけどね、向こうからじゃなくても、私から話しかけたりすつときもありますけど、向こうの方に話をしているのかどうか、それを考えるわけです。	ボランティアをしながら話をする 自分から話していいか考える
話しかけていいのか、その人によってね、好きな人もあれば、せっかく気持ちよくしてもらっとるのにねって、向こうもまた考えられますし。	話しかけていいか悩む
で、また今度あんまり長いこと考えてそうやってつかえたりしよったら、今度は私が時間が長くなるわけよ。	考えるとつまってしまう 施術の時間が長くなってしまう
最近は前のごといきませんもんね。	以前のように体が動かない
欲しいもんちゃ、買い物行ったり、外出することでしょう。	買い物などで外出したい



不安ねえ、不安は出てくる時がありますけどねえ、そうですね、さっとはなかなか。	時々不安になる
小さい時から病気をしていましたからね、昔は。そうですね、病気しないって、(今は)風邪引くぐらいですかね。	昔は病気がちだった 今は風邪をひくくらい
病院に連れて行ってもらいましたけど、どうも悪いところはないうって言われて。	病院に行っても悪いところはない
何も言うことない。食べ物も美味しいし、一人部屋だし。明るいし、何も言うことない。	施設での生活は何も言うことではない
なんでもいい。食べ物も美味しいでしょ。寮母さんも親切でしょう。何にも嫌なことない。	食べ物が美味しい 職員が親切
楽しみは、あんまりないのよ、テレビばかりお友達。	テレビばかり見ている
前の人、優しくしてくださるから。	他の入所者が優しくしてくれる
(ボランティア活動は)いつでもいい。してあげてもいい。いつでも言ってください。	いつでも参加したい
喜ばれたもん。良かったあ言うて喜ばれたから、またしてあげたいもん。	喜ばれたのでまたしてあげたい
いつでもいいですよ。私元気だから。いつでも言ってください。	元気だからいつでも参加したい
50年もしてるからやっぱねえ、コツがわかるのね。	50年の経験でコツがわかる
別になんでもしきりますけん。お話しするのも好きだし、歌を歌ったりね。	他のボランティアもしてみたい
何回でも行ってないからねえ。	参加の回数が物足りない
もう年だからこれでいい。	年なので今のままでいい
外にでるのは好きよ。ショッピングとか、旅行も好きよ。散歩も好きだしね、ドライブも。歩いて行くのも。	外に出ることが好き
何でも先立つもの、金だから。働いてないから。どんどん減るばかりだもんね。	働いてないのでお金が減ってしまう
やっぱ旅行やね、外国は言葉わからんから、やっぱ日本やね、温泉とかゆっくり行きたい。	旅行に行きたい

満足です。これ以上は贅沢言いません。何も言うことない。	これ以上贅沢は言わない
病氣しないこと。	病氣をしないようにしたい
何でも嫌なことは忘れるようにしてます。前向き、前向き。	嫌なことは忘れる
ここおったら、お葬式もしてもらえるから。私、親も子もないからね、だから、安心してここにおれるから、ここに入ってよかった。	お葬式までしてもらえるので安心してられる 身寄りがないのでここに入ってよかった
仕事するとはなんも苦にならん、僕の場合は。正直やりたらんけど。	正直やりたりない
お金がもらえる、もらえんは関係ないですよ。やっぱしああして、外に出たりあれすれば、話ししたり何したりいいですよ。	お金がもらえるかは関係ない 参加すると話が出来たりすることがいい
満足してますよ。うーん一人部屋になってから気いつかわんでようになったから。	一人部屋で気を遣わなくていい
自由にできますからね、とにかく楽しみというより気を遣わなくていいから、それが一番です。	自由にできる 気を遣わなくていいことが一番
一人(在宅)やったら気い遣うでしょ、それがここやったら全然ないから。自由にできるから。はいそれで、気分的に楽ですよ。	施設では気を遣わなくていいので気分的に楽になった
ま、気分が変わっていいですから。まあ、ある程度まあ、満足してもらって、継続してきよんしゃあみたいやけん	ボランティア活動は気分が変わっていい 満足してもらえている 継続して来てくれる
マッサージを知ってもらったっていうことは、良かったんじゃないですか。	マッサージを知ってもらってよかった
いいと思いますよ。お金とらんボランティアやけんね。別に向こうも満足いかんやろうけど、ある程度のところで。普通の業者との問題もあるし。	ボランティアなのでこのくらいでいい 業者との問題もあるのである程度しかできない

うん、マッサージでも針でもしてみたいけど、やっぱ色々問題があるでしょうけん。まあ、だけど消毒とか色々やかまし言うけんですね、マッサージやったらあれは無いけど	針もしたいが問題がある  マッサージは問題ない
息抜きになっていいですよ、僕はですよ。他の人はどうか知らんけど。	息抜きになる
あのやっぱこうして本やら借りて、続きもんやら借りようけんですね、それが終わるまで、こっちも元気で何とか、頭がもてたらなあと思ってますけど	続き物の書籍を借りる 続き物の本が読み終わるまで元気でいたい
暮らしですか？今のまま続くとが一番いいです。	今のままの暮らしが続けばいい
認知症やらならんごと、それだけが心配ですね。いつなるかわからんけんこれが。わからん。これだけはならんと。不安ですよやっぱ。	認知症になるのが不安
楽しいですね。何となく楽しいよ。色々あるからね行事も。	行事など色々あって楽しい
やっぱ、家におったらね、色々こうできないからね。例えばえーっと運動とかね。ああいうところがちょっとできないから、体が弱ってくると思いますね。	在宅では制限があった  運動も出来ないから体が弱ってくる
やっぱ入ってよかったなあ、つくづく思っております。	入所してよかった
やっぱね、人と人の付き合いや。こう、どう言っているかね、不安定であるとか。	人と人の付き合いが不安定
まあ、いいことばかりじゃないとは思いますがね。やっぱね、自分で一生懸命反省しておりますたいね。うん。	入所はいいことばかりではない
そうですね、まあ、お買い物ですよ。それから園内の行事。例えば夏祭り、それが一番楽しいですね。	買い物や行事が楽しみ
それからあの、これはあの、みんなすることですけど、誕生会ね。	誕生会が楽しみ

<p>まあ、あの、結構勉強になりますね。お客さんも色々あってですね。</p>	<p>色んな人と接して勉強になる</p>
<p>ここをこういうふうに揉みなさいとか、今はあれやけど、それを今感じてなるほどなあって感じてね。肩の揉み方はあんま強くしたらいかんとか、弱くしてもいかんとか、やっぱ指の感覚が今でもしみじみ思いました。</p>	<p>マッサージのコツを思い出す 今でも指の感覚が残っている</p>
<p>かえってよかったねえと思って。ほで、ああ、久しぶりじゃなあと思って、自分で自分ながら感じますね。</p>	<p>久しぶりに仕事の感覚を感じる</p>
<p>まず、楽しいですね。</p>	<p>ボランティア活動が楽しい</p>
<p>他は無いですね、マッサージ一本やりで、ま、針は免許を取らないかんから難しいですね。だからマッサージ一本やりです。</p>	<p>マッサージしかできない</p>
<p>やっぱこう話してくれたりですね。あ、そういうやあの、学生時代の話をするんですよよく。学生時代はこうやったと、けどやっぱあれからだいぶ年月も経ってるし、色々こう思い出すね、学生時代を。</p>	<p>お話しするのが楽しみ 学生時代の話をする</p>
<p>そうですね、なんかこうしにくいような人もおるっすね、あいだには。うん、「ここまだこうして」とか。</p>	<p>マッサージしにくい人もいる</p>
<p>時間があればこうするけど、時間が足りないからねっていわっしゃるけん。これはもう(時間が)たりないですよって、「もう終わりですか？」って言うひともおれば。もっと時間が欲しいですね、ばってんね、そげん言うてもね。</p>	<p>施術の時間に不満を言われる 時間は欲しいが仕方ない</p>
<p>そういう人もおれば、今度は「ありがとうございました」って、しっかりお礼言うて帰る人もおる。「またお願いします」っていわっしゃあ、「そうですね、またお願いします」って。</p>	<p>お礼を言ってくれる人がいる またお願いと言われる</p>

<p>まあ、元気がなによりよね。ごちそうだから、なんでもいただいて、もっともっと元気になってね。頑張りたいと思ってるんだけど、なかなかね。</p>	<p>もっと元気になりたい 頑張りたいけど思うようにならない</p>
<p>皆さんがもっと活動してほしいですね、積極的に。</p>	<p>他の入所者にもっと活動してほしい</p>
<p>職員さんは忙しいからね、大変だと。まあ、お話やらしたいですよ、もちろん。でも今はもう絶対無理だから。</p>	<p>職員は忙しい</p>
<p>園生の皆さんが積極的にお話したりね、だから男女関係なしにね。それを楽しくしたいですよ。</p>	<p>他の入所者に積極的になってほしい</p>
<p>私は運動なり出かけたり、いろんなことをしてもうストレスはたまりません</p>	<p>運動や外出でストレスが溜まらない</p>
<p>自分で自由になんでも今はできるでしょ。掃除なり、自由勝手に思うように自分ができますから。それこそ自分のことしとけばいいから。</p>	<p>自分の身の回りのことが自由にできる</p>
<p>私はみんなにお手伝いするのが大好きなんですよ。(お世話するのが)大好き、男にしろ女にしろね。</p>	<p>みんなのお手伝いをするのが好き</p>
<p>それはね、ここね、今はおとなしくなったけど、よく前の施設よりは(音が)聞こえるんですよ。ものすごく音がうるさい。</p>	<p>施設内の音がうるさい</p>
<p>ある人がここ出ていきたい、いやって言うのは何人か聞く。聞きます。でもそれはね、自分が友達作ってね、ま、ガイドヘルパーさんとかと楽しまなあって、そう言うんですよ。だけん、私は楽しい。</p>	<p>他の入所者の不満を聞く もっと楽しむように言う</p>
<p>私は趣味は、テープを聞いたりね、クラシックが好きやからね。</p>	<p>趣味はクラシックを聞くこと</p>

あの、あれが好き、ポールモーリアとかね、ああいう音楽が好き。だけんね、あれが来たら行こうかねって。	好きな音楽を聞きに行きたい
ここの市政だより、全然ダメ。私たちに関係ないもん。公民館とか、病院、子供のこととかね、ああいうことしか(載ってない)全然私たちの為にならんもん。	市政だよりの情報が気に食わない
事務所が忙しいでしょうが。いやいや、行っても途中から、園長電話ですとか、今日出張とか。ゆっくり話されん。	職員が忙しい 職員とゆっくり話すことができない
〇〇さん(看護師)ですか？ 静かな方ね。優しい。良かったですね、だんだん(職員がそろって)	職員が優しい 職員が揃ってよかった
いいことですよ。あれだけ患者さんが喜ばれたら、いいと思います。私は。	喜ばれることがいい
(苦には)なりません、そうやったら私は行かんって言いますよ。	苦にならずに参加できる
ただね、時間がね、〇〇さんが、私ね〇〇さんに直接言ったんですよ、あの、時間をあんまり早くせんで、みんなと合わせてくださいって。	他の参加者と時間を合わせたい みんなと時間を合わせるように提案した
20分で合わせましょうって。どのくらいしてます？って聞いたら 15分って言われたから、それはね早すぎますって、いくらボランティアでもって。	時間を合わせた ボランティアといっても時間はあまり短くない
園長もいつでも来てください、私のところに。	いつでもマッサージする

でもねえ、それぞれ合う合わないがありますからね、マッサージもね。だけんなるべく皆さんと協力して、なるべく私は活動したいです。	患者さんにも合う合わないがある みんなと協力して活動したい
楽しいですよ。よかったのは患者さんが一番喜んでくれる、そういうところ。もう私も開業しててわかるのは、それが一番ね。喜んでくださる患者さんの気持ちがとても嬉しいです。	患者さんが喜んでくれるのが楽しい 喜んでくれることが嬉しい
もうとても喜ばれるんですよ。そういう時はちょっと長くしてあげたいなあって思うけど、それはねって、心の中でわね。	喜ばれるとちょっと長く施術したいと思う
自分とこでは1時間とか1時間20分とかしてたでしょうが。ちょっとたらんなあって思うけども、やっぱ合わせてせんとね、だからそれは、それはきちっと、ボランティアだからね。	開業している時は1時間以上施術していた 少し物足りない ボランティアなのでちゃんと合わせたい
皆さんが同じような時間に、行った人が同じような時間に終わらんとね、あの人が長くてって患者さんが言いだすんですよ、患者さんの方が。短いとか長いとか。	みんなで時間をそろえたい 時間が違うと患者さんから不満がでる
それをね、合してわからん人はこうしてやるとかね。してあげたらいいんやないかねえと思って。	時間が分からない人には教えてあげてほしい
ボランティアね、何がある…、目が見えればね、色々できますけど。マッサージ以外ないやないですか。	目が見えないのでマッサージ以外はできない
これ(マッサージ)は皆さんが喜ばれるから、私はこれはいいですよ。	皆が喜ばれるのでマッサージがいい
うちに来てくれないって、遠いでもんって私言うもん。来てくださいって言いんしゃあ、何人か言いんしゃるよ。	患者さんの家に誘われる
とてもね、楽しみにされてね、来月もって手を握ってね。楽しみにしてありますよ。来月もまたお願いしますよって言われま	患者さんが楽しみにしてくれている みんな喜んでくれる

す。みんな喜んであるもん。	
何でも話されますよ。楽しみにしてある。 はい、楽しい。喜ばれるけん楽しいですよ。	何でも話す 喜ばれることが楽しい
やりたいことはいっぱいありますけど、やりすぎるけん。	やりたいことがいっぱいある
やっぱりね、外に出かけるとか、散歩とかね。みんなで行ってワイワイ楽しいことをしたい。	皆で楽しいことをしたい
陰口とかね、特別扱いとか、みんな全体にしてもらいたい、差別なくね。職員の方もですよ。	皆に平等に接してほしい 職員に平等に接してほしい
欲しいものは無いですよ、だってもう年で、今更何を。	もう年なので欲しいものはない



## 盲養護老人ホーム職員の語りから中心的意味を抽出するためのワークシート

語り	中心的意味
女性の利用者さんが、部屋からあまり出てこなかったりだとか、他の園生の方に対してイライラされていた方なんですけど、	部屋から出てこない 他の入所者にイライラする
以前マッサージをされていたということ聞いて、この企画に参加を頼んだところ、結構快く了承の方していただきました	マッサージをしていた経験がある 快く参加を了承する
地域の方に対してマッサージをしていく最中に、良くお話をされながら、笑顔も見られ、帰って来てから「楽しかった」という言葉が聞けるようになりました。	活動中笑顔や会話がよくみられる 活動が楽しかったと言われた
他の園生にイライラされている所が少なくなってきたのかなと思いました。	他の入所者にイライラしない
他の方に対してすごく優しくならあれて、お世話をしてくれる。不自由な方に手を貸してくれたりだとか。	他の入所者に優しくなった 他の入所者のお世話をする 不自由な方に手を貸す
発言が優しくなられた印象を受けます。	発言が優しくなった
迷われている方に「こっちですよ」って手を引いて案内してくれたりだとか、寂しそうにしている方に積極的に声をかけて、一緒に歌を歌ってくれるだとか、お話をしてくれたり、そういう接し方が以前より増えたように感じます	迷われている方に手を貸す 寂しそうな方に声をかけ一緒に歌ったり話をしてくれる 他の入所者に対して優しい接し方が増えた
以前二人部屋だった時に、同室者に対して物を盗られたといたり、物盗られの言動が目立つ時期がありまして、表情も厳しかったんですが、	他の入所者が物を盗ったと訴える 物盗られ妄想が目立った 表情が厳しかった
ボランティア活動を始めて、それからの彼女の表情はすごく柔らかくなった印象を受けました。	表情が柔らかくなった
お願いすると、「わかりました。よろしくお願ひします」って拒否がなくて、	拒否なく参加してくれる

「マッサージね、私に任して」って言ってくれるので、ご本人も充実感を持たれているんじゃないかって感じています。	快く承諾される 充実感を持っている
昔の「自分を思い出されていらっしゃるんじゃないかなあ、ご自身の自信につながっているんじゃないかって感じています。	昔の経験から自信を持っている
以前は部屋に閉じこもりがちな方でしたね、万年床で他の利用者さんが来たら話すけれども、あまり長居をされると職員に「あの人が長く居るから迷惑」と苦情を挙げられる方でした	部屋に閉じこもりがちだった  他の入所者の来室が好きではなかった
以前より、ご自身のお部屋から、みんなで過ごす食堂などに良く出てこられるようになりましたね	部屋から出てみんなで過ごす時間が増えた
入所されてそんなに経ってない方なんですけど、地元に戻りたいという言動が多くて、「もう俺はここにおりたくない」とか言われて、どうすれば園に慣れていただけるかなって悩んでいたんですが、このボランティアに参加されて、それが無くなったんですよ。	地元に戻りたいという訴えが多い  どうしたら施設に慣れてもらえるか悩む  帰宅願望が無くなった
参加のお声掛けをすると快く「いつね」って言ってくれるんです	参加の声掛けに快く答える
同じボランティアに参加されていた女性とお話されている場面が増えているんですよ	ボランティア参加者同士で会話が増えた
交流の幅が広がってる、同じボランティア活動をされてる方の中で、交流が出来てきているように感じます。	ボランティア参加者間での交流が増えた
施設にいるときはあまり口数の多い方ではなかったんです。	口数が少なかった
「誰かが物を盗った」とか、他の入所者さんを昔の知り合いの名前で呼ばれたりとか。	物を盗られたと訴える 昔の知り合いの名前を呼ぶ

<p>この方は参加されて、専門的な用語とかが出たり、仕事(マッサージ)の内容に関する話を生き活きと話してくれるようになったんです。</p>	<p>専門用語を使う 仕事の内容を生き活きと話す</p>
<p>施設の中で、他の利用者さんにマッサージをしてきて、「ここをこうするともっと楽になるよ」とかそういう会話をしながらされてるんですよ。</p>	<p>他の入所者にマッサージをしながらアドバイスをする</p>
<p>今は、昔の知り合いの名前は出なくなりました。</p>	<p>昔の知り合いの名前が出なくなった</p>
<p>若い時にされていたことなので、若い時と変わらないよって言う感じで、「若い時もしてたから平気よ」ってよく聞くんです。</p>	<p>現役時代の経験が自信となっている</p>
<p>現場としては皆さんが生き活きされているので、感謝しているぐらいですね。</p>	<p>入所者の生き活きとした様子に感謝している</p>
<p>他にも色々地域の方と交流する場を考えていけば(参加されていない)他の方にも同じように生き活きしていただけるんじゃないかなあと思います。</p>	<p>他にも交流の場を増やしたい 他の入所者にも生き活きとしてもらえるのではと期待する</p>
<p>自立支援の取り組みをしているんですが、以前この取り組みをする前は、活気がなかったと思うんですよね。その活気が施設全体に出てきたことによって、いろんな活動の範囲が広がったように感じます。なので、このボランティア活動につながって、利用者さん達も「もっと出来る事があるんじゃないか」というような活力の様なものが、この二つが合わさったことによって出ているんじゃないかと感じています。</p>	<p>自立支援介護の取り組み以前は施設に活気が無かった。 施設全体に活気が出てきて活動の範囲が広がった。 自立支援介護の取り組みがボランティア活動につながった。 自立支援介護とボランティア活動によって入所者の活力がでたのではないかと</p>
<p>(自立支援介護の)取り組み前だったら、多分やる気も起きなかったんじゃないかと思えます。</p>	<p>自立支援介護の取り組みがなければやる気が起きなかった。</p>
<p>自立支援(介護の実践)を通して、皆さんの活気が出てきたので、もっと地域の方との交流を持っていただきたいですね、そういうことがもっとできるような施設の環境をつくっていききたいなあって思います。</p>	<p>自立支援介護によって活力がでた。 もっと地域の交流を持ってほしい 地域の交流ができる施設環境にしていきたい。</p>

<p>自立支援の実践で、お年寄りが元気になられたことによって、いろんな企画が立てられるようになって、その実現のためにもっと勉強したいなあって思います。</p>	<p>自立支援介護によって活動の企画の幅が広がった。</p> <p>色々な活動の企画実現の為に勉強したい。</p>
<p>自分が持っている経験を生かして、マッサージすることで、なんか生き生きしています。</p>	<p>経験を生かしたボランティア活動で生き生きしている。</p>
<p>(施設の)外でされることによって、また、違う方と接することによって、やっぱりまた帰ってきてても笑顔になられて、すごい今いい経験をされてるなあと思います。</p>	<p>地域の交流によって笑顔になった。</p> <p>いい経験をされていると思う</p>
<p>Y 三男かも結構「少し揉んでやろうか」とか、(以前は)少し家に籠るタイプの方だったんですけど、徐々に会話も増えてる感じがです。</p>	<p>うちに籠るタイプだった。</p> <p>会話が増えた。</p>
<p>S さんもですね、(施設の)外に行くことによって、「今日行ってくる」って嬉しそうに、人と接することに対してにこってされる、笑顔を見る事ができて、嬉しいなって思います。</p>	<p>施設の外に出ることで笑顔になる。</p> <p>人に接することで笑顔になる。</p> <p>入所者の笑顔が見られてうれしく思う。</p>
<p>個室だからどうしてもお部屋の方でじっとしていることが多くなってしまって、(部屋から)出てこようとか、人と接することが減ってきてたんですね。でもボランティア活動で(施設の)外に出ることによってちょっと本人も刺激になって、いいふうに変わってきているんだと思います。</p>	<p>部屋に籠って人と接することが減っていた</p> <p>ボランティア活動が刺激になっている</p>
<p>(施設の)外に出ることによってですね、自分の身なりをきちんとして、それがすごく変わったんですよ。</p>	<p>身だしなみを気にするようになった</p>
<p>自分の洋服とかすごく変わってきたなあって感じで、生き生きして、人に見られるっていうのがすごいなんか、本人のきちんとして意識になってるってすごく感じました。</p>	<p>服装が変わってきた</p> <p>人と接することで身だしなみをきちんとしてしようとする意識が強くなった</p>
<p>前はすごく認知症状がひどかったんですね、お金がないとかそういう訴えとかが多</p>	<p>認知症状がひどかった</p>

<p>かったけど、マッサージとかすることによって、最近はあんまり訴えが少ないですね、認知症的な部分も軽減してきたってことは感じます。</p>	<p>認知症状が軽減した</p>
<p>ここの利用者だけじゃなくて、違う人と接することはいいなって思うんですよね、色々な情報を聞いて、段々段々顔つきも違ってくるし、人と接することってやっぱり違うじゃないですか。だから私は外に出て行って、利用者が喜ばれるのって一番いいと思う。</p>	<p>施設の外の人と接することでいろんな情報を聞ける 段々顔つきが変わってきた 施設の外に出ていくことが入所者にはいいと思う</p>
<p>最初ちょっと行きたくないなって思っても、帰ってきたら良かったって言ってくれる利用者って多いんですよね、だからやっぱり外に出て刺激を受けるって言うのはやっぱりいいし、</p>	<p>行く前はあまり乗り気でない 活動参加後は「よかった」と言ってくれる 施設の外に出て刺激を受けることはいい</p>
<p>いろんなボランティアがあったら、その人が持つてる力を出せる所があったら私はいいなと思います。</p>	<p>他の活動にも期待する</p>
<p>自立支援介護をしている中で、水分を強化していると、認知症の方もすごく良くなっているんですよね、</p>	<p>自立支援介護によって認知症が良くなった</p>
<p>この介護をすることによって本人がすごく穏やかな生活を送られるようになって、時々是不穏な状態もありますけど、穏やかになったと感じます。</p>	<p>自立支援介護によって穏やかな生活を送られるようになった</p>
<p>今後何かのボランティア活動にこういった方の参加が出来れば、是非。</p>	<p>他の利用者にも何かのボランティア活動に参加してほしい</p>
<p>利用者の笑顔ですね、今後期待するってことは、利用者の生きる張り合いっていうか、やっぱり人間は今の年齢じゃなくて、やる気で元気さっていうのは出てくるんじゃないかと思うんですよね。</p>	<p>生きる張り合いを持つことで入所者にもっと元気な笑顔をみせてほしい</p>
<p>ほんとになにもなかったきつって言うけど、(施設の)外に出ることによってやる気もでるから、やっぱり利用者に元気になってもらいたい、明るくなってもらいたい。そういう気持ちです。</p>	<p>施設の外に出ることで利用者に明るく元気になってほしい</p>

